川柳杨



No. 559

48年度秀句抄

十二月号

創刊大正十三年,通巻五五九号昭和四十八年十二月一日発行(毎月1日発行)昭和四十八年十二月二十五日 印 附紹和四十一年 一 月 九 日 第三種郵便物認可

姉妹品大和錦印



来道衣 調道 剣道見

警察庁·警視庁 全国府県警察 大阪府警察本部 講道館·御指定

早川繊維工業株式会社

大 阪 支 店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1電話(779)1690~2番

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ!

豚饅焼売焼餃子

叉焼饅



大 阪・なんば



TEL (641) 0551-2



く出 張店 > なんば高島屋/虹のまち鹿鳴/心斎橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋 京阪デパート/堂島地下センター/中之島サン・ストアー/なんば新川店/奈良近鉄百貨店

ピ

IJ

走

3

子

を

追

5

金

色

0

秋

0

風

レジャー

びを始めた。時々奇声を発して隣席への気兼の荷物を重ねて仮台をしつらえ、トランプ遊が一団を作っていたが、やがて通路に自分達が一団を作っていたが、やがて通路に自分達が一団を作っていたが、やがて通路に自分達が一団を作っていたが、やがて通路に自分達が一団を作っていたが、やがて通路に関いる。心なしか船尾に湧く波の音も周囲爽やかさ。心なしか船尾に湧く波の音も周囲変やかさ。心なしか船尾に湧く波の音も周囲変やかさ。

が置かれた環境の中で味わい得る真剣の味と

明日からの生活も中途半端に違いない。

いうものを作句等を通じて、

この気の毒な岩

者達に教えてやりたいとつくづく思った。

変やかさ。心なしか船尾に湧く波の音も周囲 疾り込んだが、夜来の雨で水量は豊かだし、 乗り込んだが、夜来の雨で水量は豊かだし、 乗り込んだが、夜来の雨で水量は豊かだし、 乗り込んだが、夜来の雨で水量は豊かだし、

ち込むレジャーの味を知らないこの若者達はかかってもやめない。この雄観に目もやらずガイド解説を聞こうともせぬ。なんのためにこの観光船に乗り込んだのか。どこででも出来るトランプ遊びではないか。ほんとに打ち込むレジャーの味を知らないこの若者達は

喜 秋 葵 S 寿 晴 水 氏 0 n 3 0 賀 12 2 喜 12 無 危 寿 菊 精 福 賀 6 鬚 明 は 治 0 0 8 た 10 3 ま 17 え 映

え

É

菊

0

蔭

10

あ

な

to

を

見

失

1)

川柳塔十二月号



川柳塔十二月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

川端 柳風・故高須亜前田喜代人・故岡崎 柳風・故高須唖三味・丸 重義・清 十府·岡田 博美·藤井

郎… (2)

-------中島生々庵… (1)

肉眼の確かさ ………………………………………東野大八…

30

りすると或る人から承ったことがある。

人生如何に暮したか、如何にあるべきかが

抄...... 若本多久志選… 21 32 4

梅谿庵不酔…

51 39

であると思う。

如何にあるべきかを追求精進することが大切 問題であって、如何にあるかを反省しつつ、

水煙、

一分間

(同人吟)

秀句鑑

賞

: :

分

煙抄)

浜田久米雄… 43 42

川柳中山道六十九次…(10) ………………………………… 富士野鞍馬 O..... 高鷲亜鈍 39

十二月に思う

村 好 郎

Ш

温故知新という言葉がある。これは周知の

これは、たずねてではなく、あたためてと読 と教えられ、その通り読み、その通り話して 如く、論語から出た孔子の言葉である。 支那料理の仕方の一種で一度煮た魚を後で再 むのが正しいとのことである。これは当時の もきたが、京大教授貝塚茂樹氏の説によると と為すべし」の師と為すべしの意味がはっき び火に温めて食すると、また新しい味を知る ことが出来るというのである。こう聞くと 「子曰く、故を温めて新しきを知る。以て師 「ふるきをたずねて、あたらしきをしる」

やれるだけやったと思う除夜の鐘

は思えない。 こんな方もあろうが、私にはとてもそうと 木 石

59 6361

大萬川柳「パパ」……………………………………川村好郎選… 本田恵二朗… 52 50

柳界展望------(新之助) ………(庸佑) : 56 54

各地柳壇(佳句地10選).....

路集

「納

62

-助け合い」……………………………………………………室谷徹舟選… 彩 め」…………………………………中川滋雀選… 48 48

編集後記…………(一三夫・葉子) 65 49

路

私

の句

ふるさとの山河は母の膝に似る

1/44/

座右の句

人類は悲しからずや左派と右派

III

今年こそで明けやれやれで暮れてゆき

けている。今年もその時が来た。はずかし がよい反省になり、励みになると思い毎年続 る。昔作った句の方がむしろ秀れているよう に追われて「やれやれで暮れてゆき」であ 作った句がほとんどで、常に句会や投句締切 ような楽しい思いでいる昨今である。 に思え慚愧に堪えない。しかしこうすること である。焼き直しの句、類想、気取った所謂 を習慣にしているが、二三十句もあれば上々 して残すため、自選して句帳に清記すること のメモから毎年十二月にこれこそ自分の句と 百句という川柳を作っていることだろう。そ 私のすべてがこんな心境である。今年も何

締めくくるつもりで十二月を歩き

久米雄

来年も生きるつもりの日記買う こんな気持で私も今歩んでいる。

前進したい。正に温故知新である。 今年を踏み台にし、己を基盤として新しく

残したい捨てたい机辺年暮るる

好 郎



若 本 多久 志 選

岡山県 嘉 数 干 代 香

七味たっぷりかけて人間不信の日 例えばの話が痛いとこを突き 金の重味が良心と対峙する

曲り角羅漢が亡母の顔になる 惨酷な同情 傷口に刺さる

大阪市 吉 田 韭 井 堂

補装する現場へ呉越の市議と市議 さり気なく聞けど癌とは気づいてず

噛み合わぬまま金婚の祝い膳 お迎えを待つほど悟り開いてず

野党連合天皇制はぼかしとき

受身から立上ろうとする決断 富田林市

強食とならんナイフ握りしめ 女として現役復帰する再婚

木 子

村 弥 栄

> 過去持たぬふたりとなって組むワルツ 保護色の男へ女疲れ果て

時雨をたずねて時雨の中にひとり

守口市

羽

原

静

步

風車回っても回っても木枯の音

十二月どうにもならぬ思案する

松屋町の風がつめたい十二月

十二月新幹線がもどかしく

媚知らぬ人生人間愛に生き

大阪市

江

城

修

史

脊信を美化された日の夜の深さ

茶柱が立ってみじめな待ち呆け 仮面脱ぐ女の城の隙間風 子を打てば胸に鉛の如きもの

青森市

I

藤 甲

吉

渇き切った人と疲れた御堂筋 シリ出しに戻ってみても歪む道 要珠沙華記憶に母の唄があり 合槌に哀しい顔もして上げる 合槌に哀しい顔もして上げる	甘言にそむく私の票があり 特空へしみじみ朝の宿の下駄 秋の日の血圧同士電話口 公休はつかれいたわるしのび足 があり 難病とは別に長寿の相があり	にたみの余韻 歴史が通言のよさ嚙みしめる茄子 一次くせまり湯煙り陽にあ 一次ではまり湯煙り陽にあ ではまり湯煙り陽にあ である猫子	出迎えの傘のしずくを眼にとめる 出迎えの傘のしずくを眼にとめる 出迎えの傘のしずくを眼にとめる
河	岩	高	IE.
村	田	橋	本
日	美	操	水
満	代	子	客
大り行く歳の足音を聴く夕べ 十二月僕の歩巾は変らない 観音を描き仏心によみがえり 起重機の横でこおろぎ啼き続け	藤井寺市 とおらしい女にさせる萩の路 しおらしい女にさせる萩の路 しおらしい女にさせる萩の路	何時かわの何時かが今日に母の逝く さみしやの父元気づけ元気づけ まっさらの墓標一きわ亡母眠る 心から花を供えた六地蔵 さみしさや夢に生きてる亡母に会う	ながいながい愚痴聞き役でいる電託 新さえままならぬ世になって老い ネズミ取りがいると聞えたクラクシ 九条武子が立ってるような月見草 長沼基地判決 利決を吉報と聞くわが思想
重機の横でこおろぎ啼きなっまでも止っててくれ赤は一日僕の歩巾は変らないこ月僕の歩巾は変らない	らしい女にさせる萩の親しむ母の机と子の机 大も日焼けて故郷あたれ萩貧しき心充たすか があたいと思う日の別	大阪市しさや夢に生きてる亡母に会うら花を供えた六地蔵 さらの墓標一きわ亡母眠る さらの墓標一きわ亡母眠る	吉報と聞くわが思想 で基地判決 で基地判決
重機の横でこおろぎ啼き続け 一月僕の歩巾は変らない 一月僕の歩巾は変らない こ月僕の歩巾は変らない	らしい女にさせる萩の路 親しむ母の机と子の机 親しむ母の机と子の机 があたいと思う日の別れ	大阪市しさや夢に生きてる亡母に会うら花を供えた六地蔵 さらの墓標一きわ亡母眠る さらの墓標一きわ亡母眠る	を取りがいる機関を表している電話であると聞くわが思想を 主報と聞くわが思想を を関くわが思想を を表しまする。 をましまする。 をましまる。 をましまる。 をましまる。 をましまる。 をましまる。 をましまる。 をましまる。 をましまる。 をましまる。 をましまる。 をましまる。 をましまる。 をましまる。 をましまる。 をましる。 をましる。 をましる。 をましる。 をましる。 をましる。 をましる。 をましる。 をましる。 をましる。 をましる。 をましる。 をもる
重機の横でこおろぎ啼き続け 一月僕の歩巾は変らない 一月僕の歩巾は変らない こ月僕の歩巾は変らない	藤井寺市 のい女にさせる萩の路 でい女にさせる萩の路 であたいと思う日の別れ	大阪市 小 出しさや夢に生きてる亡母に会うら花を供えた六地蔵 ら花を供えた六地蔵	吉報と聞くわが思想 吉報と聞くわが思想 を表し聞くわが思想 を表し聞くれが思想 を表し聞くれが思想 を表しまする。 をましまする。 をましまる。 をましまる。 をましまる。 をましまる。 をましる。 をもる。

おひっ 軌道 物価高 サー 女性化し男性化して衣更え うまいことやった鏡に見せる舌 曼珠沙華計報に耐える道に咲く 艶ばなし萩がこぼれる屋敷跡 ジングルベル鳴るとて痛む歯ほっとけず 乱れ咲くすべなく寡婦の血が匂う ご鞭達たまわってからハネムーン 手鋏の鈴いとしんで母は老け 目に物を見せん思索が眠らせず 今年また同じ追想の彼岸花 童心に還えす郷社の笛太鼓 箸の供米野仏笑み給い あっ の目にまだ知床の海があり 会鍋政治の貧困など言わず 遺 「の中に妄執の業があり カスのジンタ還らぬ日を奏で ぷの線でおとなをたぶらかし はあと十年の子の重み 雪 女の思慕が乾いてる 句 12 住 む寒 がりや 和歌山市 大阪市 笠岡市 西宮市 大 高 島 亚: 坂 井 居 木 形 葵 桃 百 水 水 里 酒 奥座敷 芋のつる恍惚の目にあおし 客一人高座二人でフタを開 どこをどう押えてみても だまし舟 ある日ふっと紳士マスクがじやまになり 獄窓での体験魂をぬりかえる 煩悩の濁流に目をとじる 錦秋の候にさびしき薬瓶 心ぞうの機嫌とりとり京の街 五十年の虹を彩どる今日の宴 敬老の日金婚組に並ぶ幸 師匠から見れば寒うなる芸が売れ 北まくらさせた姿の日本地図 あの雲は写楽に似てる 誰かに似てる 酒飲まぬ男の渡ってきた世界 役得の立場へ自分置いてみる 黒字倒産他人ごととは思われず 視聴者を舐めてる続続根性もの 1 1 垂井葵水氏交通事故で急逝(48・11・1) レ紙を買う行列とは呆 扉と鍵が多すぎて け 九 大阪市 不二田 尼 天 九 出 IE. 緑 Ŧ 之 助 栄 梢

解かきあるかときいて松魚あげ 秋雨にぬれる柳はしよんぼりと 秋雨にぬれる柳はしよんぼりと で見合めぐり合う宝船 で見っトのベンチで足を見ていたり 向き合えばこの空間にふたりきり 方丈記僕もたいくつなどしない	を幸症そんな気もする日のありて を立てし、 を立ている。 を対している。 をがしる。 を	恍惚の数珠野仏に話しかけ 状深し家を取り巻く音も秋 を眼と拡大鏡で辞書をくり 倉敷市 温古知新と心の壁に大書する	中国の酔いが回った茅台酒 高砂に遠い夫婦で旅に出る 高砂に遠い夫婦で旅に出る 岡山県
直 原 七 面 山 方	山 川 阿 茶	本田恵二朗	浜田久米雄
登灯を守り巣箱をかけいそぐ これ以上落ちることなし深眠り 淡々と別れたあとの湯がこぼれ 手さぐりの思慕へ師走の鐘が鳴る 宝塚市 傍 ハッスルしても老人に職がない マンションにサンマにおうてささやかれ マンションにサンマにおうてささやかれ	月の出へあっさり政治論をやめこで割って見て考えることばかり流行の外で背広と話し合い。	よるさとへ帰れ帰れと穂が招く 人のくせ飽かず見ている待合所 保津峡より嵯峨へ 作の葉の影かさなって歌碑ねむる である嵯峨野は秋の陽煙る 育敷市	帝 く 生
	小	水	40
島	野	粉	柳
静	克	千	潮
馬	枝	翁	花

怒鳴るより術べない男の意い夢 鉄筋を支える砂利として沈み 鉄筋を支える砂利として沈み 大楽した水には見えずネガの 下	オブラードに心くるんだ化粧する 転北の刹那を飾るのも女 関山県	公園の二人をロマンにする夕陽 世相とは恐しきものよ子を捨てる 東大阪市	歩るくこと覚えて這うことを忘れ歩るくこと覚えて這うことを忘れ	株だけが下り天下の秋もな 物価高騰 物価高騰	老骨が折れる思いのラ
遠い <i>夢</i> 遠い <i>夢</i> で 下関市 不 が の 意地が燃え	だ化粧する	を	つとを忘れ 一句) 門真市	おなし	のラッシュアワー高槻市
石	浜	宫	福		福
川 侃	野	西	島		田
流	奇	弥	鉄		丁
洞	童	生	児		路
くりき岡泣市	質にて、	白滋愛でし人思いつつ李朝展一病と道連れで越す喜寿の坂待つ時をつぶす女はパフ叩く有の時をつぶす女はパフ叩くがいからいからいかがある。	高野山にて	り市	潮騒へ都会を抜けて寝つかれずほんとうの倖せたまに妻が酌ぎ
木	台。奥		仲	古	
山	谷		ど	田	
遠	弘		どんたく	水	
=	朗		<	車	

秋の 松茸 中びんで満ちたる秋の夜のビー糸まとわずマネキンだった 五十 堪えかねた英知の重みへ石榴割れ 髭とれば易者も淋しい顔を持ち 釣瓶井戸へモーター こつこつと適材適所のまま停年 テレビドラマには泣いて、嫁に当たり 心老いてー 抱きつづけた夢開かぬまま 深みゆく秋見せつける無人駅 コスモスはよろめいていて美しい 貧乏を愛しきれいな詩をつくる 数面へ又正月が近づくか 本当の事言うて世間を狭う生き としよりの寝言か生活に無駄があり 台風の上陸もなし実る秋 ふる里の駅一族で埋めて春 すの高 路の 月ひんやりいつしか肩が寄り おしやれ入歯をはめて出る 価 へ匂いだけを吸 白 本の秋が美しい 据えて詩が消え 松江市 松江市 島根県 竹原市 今治市 1 秋 ル 中 Ш 舟 藤 越 木 JII 井 内 智 与. 静 晃 明 根 男 朗 水 水 石室の五百羅漢に 藤村のこころに触れる医光寺 潮騒に遠き人恋う萩城址 曼珠沙華ひとり生きぬく心決め 御厚意は素直に受けてまとまらず 花の香のうせた見合いもはじらいて 胸ふかく御名刻みいてはばからず 弁慶のはばきの跡の海 松茸の匂うレターで招かれる スランプを耐えぬく気なりマムシ酒 般若経うなずくことの多くなり 曼珠沙華妬心悲しく燃えさかる 運命線の乱れて走る掌を見つめ ピンチ脱出冷たい水をごくり飲む 老いの日 内縁と知らず勇ましい呱々の声 北陸吟行 々好日三猿主義守る 术 スがい 0 川川ぎ 東大阪市 た 香川県 大阪市 神岩 市 Ξ 久 本 小 米 井 多 浜 奈 酔 柳 牧 良

子

志

夢

恍惚のうしろで僕は汗をふく 貰らったらもう連れて出るハネムーン 姪の身に十二単衣が重もからん 白い眼を集めて噂をまく女 見直してから本当に好きになり 実印がちびてる吾が家にある歴史 目的 Ш 母を背に水の流れを歩るこうか山の峰白い帽子がお似合いで 雪だより山 子の 宍道 するすると今年の幕も下りそうだ ルサロにかってのスターがきて師走 っ白な灰になる身と思われず 歩るく男の背に嘘がない ツ孫を見直す「優」がふえ 孫と日進月歩 新郎新婦 湖 へ化ける女の念を入れ 育ち寝床を別ける訳とする 0 あかりめざして高ぶりぬ の高さが呼びに来る 富田林市 桜井市 下関市 倉敷市 大阪市 岩 玉 11 板 有 本 弘 信 幡 尾 雀 半 新 岳 里 踊 休 之 子 門 助 風 人 秒針は戻らず悔を負うて生き 芝翫香ここも月賦がきく時世年の瀬に身を置きたくて街に出る 陶工の 片言の駄々を嬉しく持て余し 藻には藻の縄張りがありもつれ合い 満ち足りた日を夕焼けと話し込み 安逸ヘラクダの瘤が馴れてくる 空廻りしたユーモアへ眼鏡拭く 果せない 川濁りつつも大空見て流れ 人間の罪と罰との賽を振る ドレミフアン・メロデイ連れた鱗雲 秋雨を待つ落柿舎の蓑と笠 仇野の墓念仏に丸うなり 人恋し天津栗を焼くにおい ひと言が今宵酔えない 不甲斐ない父だが夢は持っている 母になり妻となる日の 妥協せぬ男の子だからたのもしい 指 義理ずつしりと肩に来る に生きてた土 白い足袋 酒となり 0 竹原市 米子市 松原市 八尾市 竹 森 八 香 谷 中 木 JII 垣 酔 史

K

好

代

居

大阪市 川 口 弘 生銀婚へ箪笥の引手錆でいる 松江市 小 林 孤 呂 二鳴けてたらゴキブリそんなに嫌われず 場付でたらゴキブリそんなに嫌われず	手の荒れがめだつ農夫よ秋の詩再会へ指輪の位置が気にかかり日曜のない作業着へ夢をつめ	広島県 高 橋 鬼 焼 新学を削る木の香に湧くファイト がすみなさいと欲求不満と云う顔で なやすみなさいと欲求不満と云う顔で	開け放ち木犀の香を通らせる 松江市 柳 楽 鶴 丸 東の香に散歩道変えさされ	東大阪市 竹 中 綾 女出建屋の事務二坪程で足り門口にせめて並べる植木鉢門口にせめて並べる植木鉢屋台店地下足袋の郷愁つのらせる
生 一		沙C	Σίι	У.
大阪市 東日和お隣りさんも留守らしい 対しかた空気の中へ孫放屁 はりつめた空気の中へ孫放屁 かとわいた人へときめく罪を知り	車座の夕餉一家の和がこばれ 頂上は小鳥に残す柿と決め 国標へ心のロープ弛めない	食べに出たメニュー油濃いもの 食べに出たメニュー油濃いもの おちつきを見せて娘も二児の母 での裏に秋しのばせる入道雲	食欲へもう安心の靴を履き 食欲へもう安心の靴を履き か必ずと聞いてにわかに気がゆるみ	盗まれた後そこいらを拭きまくり 鑑識にようも寝てたと苦笑され 鑑識にようも寝てたと苦笑され
わいた人へときめく罪さ見せて夜警の老いようで見せて夜警の老いようで見せてでいる。	の夕餉一家の和がこぼれのない天職に明けて暮れのない天職に明けて暮れ	裏に秋しのばせる入道雲 のきを見せて娘も二児の母 で出たメニュー油濃いもの は少陽はぐっと北へより	年と聞いてにわかに気がれる方安心の靴を履きれる方安心の靴を履き	まれた後そこいらを拭きな過じようも寝てたと苦笑な識にようも寝てたと苦笑な識にない。
大阪市村を見せて夜警の老いし影音を見せて夜警の老いし影音を見せて夜警の老いし影音を見せて夜警の老いし影響を見せて夜警の老いし影響を見せて夜警の老いし影響を見せて後継がある。	の夕餉一家の和がこばれのない天職に明けて暮れのない天職に明けて暮れ	裏に秋しのばせる入道雲のきを見せて娘も二児の母のきを見せて娘も二児の母む夕陽はぐっと北へより	年と聞いてにわかに気がゆるみ年と聞いてにわかに気がゆるみ	まれた後そこいらを拭きまくり う銭は捨てて逃げてる憎らしさ つもなら置いてない金盗まれる
和お隣りさんも留守らしい 背を見せて夜警の老いし影 すを見せて夜警の老いし影 で見せて夜警の老いし影	の夕餉一家の和がこばれのない天職に明けて暮れのない天職に明けて暮れ	裏に秋しのばせる入道雲のきを見せて娘も二児の母のきを見せて娘も二児の母	へもう安心の靴を履きへもう安心の靴を履きも大安明日へ延ばせない	まれた後そこいらを拭きまくり まれた後そこいらを拭きまくり つもなら置いてない金盗まれる

汐騒が釣人の気をたかぶらせ 承諾書後で話の裏を知る 立ち竦む袴の裾にある吐息 雑 停退にまたサイコロを持ち直す 生き活きと今日を確めつつ生きるいいんだろかこれでこれから寝る 汚され 偽 脱衣箱今夜も同じ番号か 人を知り己を知ってあきらめる 出来ぬ子の小さな努力ほめてやり 木枯しに追わ 説得をするの 遍路の笠へうなずく地 ッ先の陽に五体の影映る 念を眠らせ心眼呼び覚ます を呼ぶ切ッ先言葉のある如く わりの男が哭いてるビルの谷 わりの女が拭いてる三面鏡 通る空へ葉ずれの音も秋 喪失一瞬そこに人間味 て踏まれて俺の靴となる れ家路を急いどり に裏から表から 蔵さま から寝るんだが 和歌山市 平田 倉敷市 八尾市 大阪市 市 藤 久 神 大 家 村 谷 井 路 代 太 凡 春 美 九 茂 男 H 津 郎 幸 晩秋の夜風素足に絡みつき 当然の苦行自慢する若僧 老僧の年輪と見る貌の皺 なりそうでどうにもならぬ十二月 十二月一 空を抜く青旅を追いつづけ 喜びを知るらしバスがゆるく揺れ 紅白で小物をくくる日が続き 寝つかれぬ耳に深夜が語りかけ 開墾の土へはぐくむ鍬の夢 味噌汁の香が満つ2DKの 愛情は 人形の さよならは風が運んでゆく落葉 ターミナル一期 海峡の夕陽をまねく島の稲 雷鳴が心 ふる里の山河まだまだ生きてい 木としての重みに耐えている せば出る力を隣の火事で知り 酒 何の苦労もない 息いれて吸う煙草 の空壜まで隠 のもやもや消 会の群ならず て呉 岸和田市 幸 大阪市 岡山 大阪市 れ た 県 福 児 出 中 島 浦 原 Ш 与 勝 沙安 敬 몸 晴 志

雀

大目の達磨いま両眼をみひらきぬ 片目の達磨いま両眼をみひらきぬ を おの芯まっすぐ伸びて珠玉の実 を でし人形となる身繕い を を を を を を を を と が と が と が と が と が と が	育伸したつもりで苔は岩を這い 程宿の食膳おふくろの味がして 整野燈台 整野燈台	放会をある	高根県 協議風先生・岳人氏に寄席へ(大阪二句) 手の温みひとりひとりの懐しさ 感激が揺れる夜汽車にこぼれそう 手に触れた途端瞼のなかに活き 衣更え若さが欲しい目が欲しい
河		宫	金
野		尾	井 江
君		あい	文 正
子		き	秋 朗
ライバルの巻かと言って耐かと言って耐がなる不安子供がない。	東の間の命よ南の手を淋し	突如聞ゆる 大杉のてっ 大杉のてっ	オール洋式その オール洋式その 岩田帯妻の願い 岩田帯妻の願い
アルバムに妬いた証拠の爪の跡のと言って耐乏生活ともいかずかと言って耐乏生活ともいかずかと言って耐乏生活ともいかずかと言って耐乏生活ともいかずかと言って耐乏生活ともいかずかと言って耐乏生活ともいかずかと言って耐乏生活ともいかずかと言って耐乏生活ともいかずかと言って耐乏生活ともいかずかと言って耐乏生活ともいかずかと言って耐乏生活ともいかずからいい。	東の間の命よ花が炎えている 育敷市 谷町の手を淋しがらせて冬に入る でいる	を蝶のおぼつかなきを目で追いぬ 大杉のてっぺんを指し、子にさとし 大杉のてっぺんを指し、子にさとし 大杉のするが如く除夜の鐘 に崎市 高	通院の一年有余妻も耐え ・ 大阪市 柳 ・ 大阪市 柳 ・ 大阪市 柳 ・ 大阪市 柳 ・ 大阪市 柳 ・ 大阪市 柳
跡ず豊め弱気			くなりそうな くなりそうな とも とも とも とも
跡ず豊め弱気	谷	河高	え くなりそうな なり 大阪市 柳 とも とも
跡ず霊 め弱気	谷井	河 高 股 津	え くなりそうな 大阪市 柳 原 なめこ汁

ぽっかりと大きな空洞娘が嫁ぎ スキ焼きに松茸高価な香を放ち 栄転も左遷も人を人が決め 大阪市 室 谷 徹 舟 仲人口に乗った夫婦で恙なし 新聞の草紙知らない子らの文字 立関で仕事忘れるベルを押す 盆栽の乱れ暮しも乱れてる 兵庫県 河 原 3

仏前で二世を誓う娘に涙 式済んで一人こらえる虚脱感

子を捨てた親をロッカーだけが知る 尾道にて 京都市

松 Ш 杜

的

鳥取県 鈴 木 村 調 子 小銭皆使い果たして来たお山

稲荷お山巡り

百八つ梵字を彫った鐘うれし 大橋をバックに多宝塔の赤がよし 文学碑ロープウェ

イを待つカメラ

人生も時の流れの泡でしか あわせは指のあいから洩れるもの

一円貨君らの世じゃもうないぜ

深夜作句時計の音を三度聞く

造花の苛立ち色褪せても散れず 生半可噛じって出鼻くじかれる

亡妻に似た人街角で見て慌て 末席の正論核心を衝いている

枚方市

宮

JII

珠

笑

白

弘前城

大田市 藤 \mathbb{H} 軒 太

楼

竜野岬

層雲峡熊に逢いたい気も起こり 北海道ところどころ

0

3

雲か海かそれかあらぬか知床よ 網走の今も変らぬ練瓦塀

ソ連からヒタヒタ押して来る波か 姫路市

大

江

秋

月

朝蜘蛛をそっと逃して靴を履く 駅長の帽子とばして特急車

兼六公園にて

栗林で見たよな松の枝っぷり 二女結婚

高島田見えて挨拶ゆきづまり

京都市

都 倉 求

芽

九十九折曲るたんびに無の赤 灯台を芯に群青の空と海

壁の凛々しさ桜の秋を伏せ

14

秋風 平和 ライ 栄転左遷感情殺し 泣くときに泣ける路傍の石でよし 母がまだ手を振っている無人駅 つけまつ毛うっ H お祭りが済むとひっそり秋の村 さよならがバイバ 滑らかに山影沈めて静 ふり切って心に未練しまい込み 1曜大工また飲む種を残しとき 深鹿だっ × 二休嬉しがるほど金はなし スター 犀 63 ラ色の夢う 温は寂 心をうっ なり秋晴れの空ふと憎む 1 いで稼いだ程は草が伸び バルに道を開 0 30 ジに赤いてんまりはずんでる しい たわたし に秋行くところを教えられ 0 かりもらしたハプニン 明日は起きて来ぬ男 懐 た たね な かり落とすもらい泣き お た辞令書く いているゆとり イになり子と遊ぶ を悟す冴えた月 淋 0 住 ili 映す 地 諫早市 倉敷市 倉敷市 愛媛県 市 グ 原 竹 松 村 111 H 内 下 Ŀ. 端 明 梁 加 柳 春 童 水 子 童 友問えば迷路のようなとこで住み貞節が消えて離婚へ燃えうつり お芝居 夕顔 曼珠 告白 楽天の禿へ白髪の愚痴が過ぎ 別居する夫婦仮病の名をさがす ころび泣きながら駆けて行く子に拍手 友情の絆出雲路 赤い羽根 完全を求める女で恐くな ぬ 寝ころべ III 一戸の持 一福も るま湯 行は性別不明のもの 絶 がい 蘇 の二 の風 一人鳩い 沙 噴煙寝不足に見えハネムー 華 て夜中 0 晴 ば秋 中 スター 情無口な隣人も来て 耕雨読には遠く つむ子に彼岸教えられ 0 に浸り断崖 っせい 徳利酌 へ上る梯子ゆれ 自分を入れ 0 0 たぐりよせ が売ればよく 色なる樹々ゆれ 目覚め安堵する に飛び立 いでばかりいる など知らず ばか て泣き 岸和田市 b 5 堺 大東市 呉 82 売 れ 3 1 市 市 3 葛 高 小 土 槙 城 橋 岐 島 伊 7 1 蘭 英 万 17

7

詩

子

郎

夢のない唇だから紅くぬる市場籠男は近い店へ行く 洗顔 無慾から出る真実の声を聞 綿菓子へ幼ない頃の村祭り 写真屋が家内の方へ寄れという コンパ 和 虚 よく聞けば雑音みんな生きる音 接点が合わぬ対話 役者ではないから涙すぐに出る 父と子の対話は父へ通話 びわこ渡る風も話しの仲間入り 倖せを肌で感じる風呂上り 嬉 逆境に夫婦 イホー なる心 0 しさは多忙を分つ夫の居 皮に個性が耐えているラッシュ 間 額も聞 0 より犬が知ってる人心 水も日 クト覗いて老を押し返し ムここで仮面をかけ替える 鏡に語りかけ く団交の熱っぽさ 0 毎に秋の冷え 歩巾信じ合い へ骨が折 n 去 7 三重県 大阪市 新宮市 大阪市 松原市 111 飛 大 黒 玉 Ŀ 矢 H 置 大 好 + 真 重 輪 人 郎 砂 過疎 渋滞に 浦 自動機にまかせて煙草屋早やじまい 死線越す女神にも似る娘の寝顔 おばあちゃんですよ赤ちゃんこんにちわ 海の匂い連れて魚商のバスへくる テトラポットから潮風のなかに入り 生き延びてカルキの匂う水を飲む 文化財みたいな声の 猛暑にも耐えてたわ しおれない造花に生きる力なし 独り娘の稼 愚かにも赤く見てい 左利き泥鱒すくい 願わくば五風十雨に我が老後 生生流転 J 足 敦子誕生 淡路島ゆき の宮筧の水の味を知る 袋の白さへ女包 す秋の空には猫が要る カーステレオの鳴る鈴鹿 いだ部屋に空虚満ち 野山は錦にころも変え 0 籠が右 ノリト聞く わの柿熟れる た人の花 わ せる 島根県 島根県 大阪市 大阪市 大阪市 藤 种 中 神 几 田 原 島 JII 頂 秀 英 秀 留

子

峰

子

子

結ばかし出て周山秋しみる ・ 周 山 ・ 周 山	ず が落ち	東梁下戸の顔で去に 東梁下戸の顔で去に 東梁下戸の顔で去に	シワしばし自画象の筆を置く のような娘におされけり と至くかわした年の功 と軽くかわした年の功	無造作でみえておしやれのいかす人 お客手にギヤンブル情報一とくさり 串かつの客	87日 11日 11日 11日 11日 11日 11日 11日 11日 11日 1
柴		洋	竹	入	
~	F	₽ P	馬	道	
**チ市なかさまに振っても出ない智恵と銭独りきく声に詩あり秋の虫をかさまに振っても出ない智恵と銭	どをき シ	五体ばらばら腰の愚痴脚の愚痴六十の腰ひん伸ばしひん伸ばしかんゆばしかんゆばしかがになり	けて行く秋風には海の深さの虫が無沙汰のほかは無沙汰	効 ろで な	守口市
林 福	梅	岡	木	渡	村
井	谿	崎	村	辺	田
瑞 迷	庵不	祥	水	暁	瓢
枝 路	醉	月	洞	童	太

闘争は嫌いチャンネルはレスリング	岡山県池田古心	子と同じ年の労組に引きづられ日本をやたらと急ぐ道が出来人間も印相などにあやつられ	松江市恒松叮紅	餌代がそっくり海へ、獲物なし僕の方がとぼけておく子の話	広島市 山 田 季 賛	つきつめて見てもわからぬものは愛割り切れぬままおし込める妥協	ずたずたの愛つくろうてつくろうて 大阪市 島 田 雄 峯	E E	うたた寝の足の方から冷える秋	手がいっぱいないと思ったら 倉敷市 野田素身郎	読経に始まり母の今日が明け百薬の長を飲み過ぎ胃を恨み	に易うなほどに火ぎ、バメウェー 鳥取県 清 水 一、保	無口また今日の始まる想を練り	ペン執れば心うるおう雨となり	兼なことにつる器用さ身てつける
直感をズバリ男がうろたえる	貝塚市野坂つき子	同病がいたわり合うて順を待ち故郷の人情僕をつつみけり	大阪市 福井多蘭子	人のことだからうわさに花が咲き茸はえた山にゴルフの芝が伸び	岡山県 横山 一声	知らんでもええ常識の世を嘆き後添いが取りしきってる三回忌	三回忌仏にすまないほどに酔い 写音市 平 日 実 男	対日民	白菊の闇にも白く匂う夜	背景の風文-6よ) 傘雨の 鳥取県 森 田 布 堂	値上りの活字がつづく社会面一線を意識しながら酔った振り	見ざらっ子ざらったこれ子を小豆島	富田林市 和田維久子	里の味時代は母の味も消し	5つ 加到い青音 こちる 不安

貧弱な政治世論をよせつけず出勤へ朝の一句を妻に見せ	İ	つっかかる言葉甘えともとれて	動西	5月と呼ばなまり 三上	遇刊誌に留守番させて席をたち	友の	座布団の模様上座だけ揃い	笠岡市	手相観の二度結婚は当ってず	たしかめに起きる施錠へ足の冷え	挨拶の仕方袴はきながら	大阪市	綻びだしてきた思い出張りかえん	魚眼レンズの俯角に慕情ゆれ	崖信んじ切ってる崖下の家	島根県	武器錆びておんな路傍の闇にいる	山一つ越えて合唱する夫婦	道草をして平凡な楽譜かな	柏原市	倖せな女のぐちは瞳を丸め	待ち人は来ずおみくじはうそをつき
	谷			時				松				本				小				大		
				広				本				庄				砂				峠		
	無			-				忠				金				白				可		
	閑			路				Ξ				Ξ				汀				動		
淋しさを知らぬ多忙へ感謝する 頼りたい女心のぞいた日	水位もう気にせぬ長雨嫌われる	大阪市 津	人生観語るベッドにある暮色雑念を払う作句へ後の亥	荒涼へ相合傘の手の温み	島根県 大	吾が読経弥陀の瞳に静と静	何日の日も慈眼に尽きる阿弥陀様	笑み給う木魚の中に阿弥陀仏	富田林市 浅	毛筆展読めない文字ほめておき	無駄な抵抗か強精剤を飲む	この次は何の値上げしよるやろ	東大阪市 斉	偶然の一致か同業みな値上げ	身なりから水商売と見た検視	独身の頃の話しも出して責め	橿原市 岩	此処はどこだろうと気楽なバスツアー	もう沢山ですとぼつぼつ飲みはじめ	孫のためですとみかんの苗を植え	生駒市 草	老妻のしきたり朝の靴を出し
		守守			八森				川				藤				井				十深	
		柳柳			孝				八八				三				本				於醉	
		信			華				郎郎				十四四				蔭 棒				升	

沓の中へ出
十へ山
十へ山
八出
H
7
仃
5
T
=

大阪市 今 西 章 雅

老い支う杖には年金細過ぎる

公害のサンドイッチの街に住み

ひよっとこになれぬ気まじめ過ぎる顔

倉吉市 渡 辺 菩

句

秋晴はいつも心が旅に出る 旅に出る服は孤独の色を着る 引越しをしてから妻の掃除好き

伊丹市 小 JII 静 観 堂

中将の能面かかげてじっと見る 星明りあの辺に父母います妻も居る

大東市 土 井 浩 輔

若 本 多 久 志

十津川紀行 (三句 点滴に生死の境さまよいつ 王侯のように附添いこまらせる

大塔宮偲ぶ十津川秋深し 露天風呂心の垢も流しける

秋の海航跡白く闘志湧く 実印のいること多し十二月 紅葉のふたひらみひら露天風呂

北 Ш 春 巣

会うたとこも別れたとこも同じ橋 病人の眼に形のわるい咽喉仏 拗ねている娘へすき焼が煮えつまり 餌持って逃げた小鳥を追つかける

魚偏になると食欲そそられる

寝たきり老人へもインフレは容赦せず

初心者マーク泥水をかけて過ぎ バイコロジー朝は駅まで妻を乗せ

窓会名簿前の前の方になり 北野高校創立百周年記念祝賀会(四八・一〇・七)

久々に秋の音するページ繰る

Ш

村

好

郎

寝返りてうれしい夢を温ためる 老夫婦それぞれの思い秋深む 時効なき悔 妻も知っていず

雨もまたよし嵯峨のたたずまい

五カラット上げ底めいた女なり

世が世ならとたこ焼屋のおっさんが云う ある距離をおいて師弟のつつがなし

御先祖に似て段々長い顔になり 系図屋の書いた先祖をもて余し

菊 沢 1 松

景

西

尾

栞

48年度



同 人の 部

神戸市 小 浜 牧 人

倉敷市 木 Ш 恵 朗 っても揚っても雲雀に空が

ある

落ち着かぬ心へ香を焚いてみる 大阪市 小 出 智 子

倉敷市 能登原 白 水 片目

の達磨いつも心の隅に抱く

垣 史 好 子育ての素顔ダイヤのごと光り

東大阪市 竹 中 綾 世界地

図

日本は力んでるみたい

女

ブーメランそんな夫にあきたらず

有終の美を柿の実燃えており

真白く干して女は満ち足れり

眉青き尼僧に業の燻る夜 仲

大阪市 河 野 君 子

蔦植えて蔓のゆくえに夢を追う 大阪市

夢で会う亡夫はあっちむいたまま 宮 尾 あ 10 き

大阪市 有 信 新之助

不倫の亡母を許せるほどに女知る 青森市 工 藤 甲 吉

菊西北若中 沢尾川本島

春多生 /]\ 久々 松 園栞巣志庵

橘大戸正川 高坂田本村 薰形古水好

風水方客郎

1

野

克

枝

清

水

保

_						_		_	-	_		_		_		_	-	-		
勤続二十年変形した妻の指	松江市	サングラス人間逃避している。	大阪市	出勤簿わたしを殺す判を捺す	八尾市	耳鳴りの他 音もなし高野の	笠岡市	都合よい事だけ聞くも長寿法	島根県	テレビドラマいまわの際によ	宝塚市	夏座敷魚の額を泳がせる	藤井寺市	髪振って世はバラ色の口答え	新宮市	大の字に炎えて仏の去り難く	八尾市	ひと針ひと針縫うて男を追い	鳥取県	子が母を思う日 母も子を思い
	柳	気	神		高	夜	木		堀	く喋	傍		西		大		高	つめ		(1
	楽		谷		杉		Щ		江	り	島				矢		杉	る		
	鶴		凡		鬼		遠		正		静		()						村	
	丸		九郎		遊		_						わ						諷	
	, ,		1/12		娅				切		馬		と		郎		遊		1.	
結婚しました自然発火です	松江市柳楽鶴	ゆっくりと廻りたい日もある地球	新宮市 川 上 大	どうにでも廻る舌だよ骨がない	大阪市 福 井 野迷路	現実を見る眼は片方だけにする	富田林市 岩 田 美	鉄橋に夕日倖せまだ遠い	松原市 谷 垣 史	抱いている秘密に女みたされる	岛 富田林市 木 村 弥栄子	ほこりたてまい心の歩道そっと行く	を 倉敷市 本 田 恵二朗	神さまが作った涙だ 流さんか	以 大阪市 不二田 一三夫	バイブルに手を乗せてより愛重し	世 神戸市 小 浜 牧	花道が切れてわたしの足音だ	· 自敷市 水 粉 干	途中下車出来ぬ話に乗せられる
	勤続二十年変形した妻の指	市柳楽鶴	市柳楽鶴	市柳楽鶴	市る気神谷	市 気 神 高 柳 楽 谷 杉	市る気神高 高 彩 谷 杉	市る気 物 高 木 郷 谷 杉 山	市る帝 す 市 の 市 法 柳 高 本 払 払 ※ 谷 杉 山	市る所 す 市 の 市 法 算 柳 神 高 木 堀 楽 谷 杉 山 江	市る気 神 高 木 堀り 江 谷 杉 山 江	市る 市る 気 神高 本 本 に に に に に に に に に に に に に	市る気 神 高 木 堀り島 常 谷 杉 山 江 島	市る 市 古 市 法 算 よく 業 ら 本 堀 県 り 島 楽 谷 杉 山 江 島	市る帝 す 市 の 市 法 算 よく 帯 え 元 気 柳 髙 本 堀 収 島 楽 谷 杉 山 江 島	市る帝す 市 の市 法 算 よる 市 ま 京 京 板 柳 神 高 木 堀 蝶 り 島 矢 谷 杉 山 江 島 矢	市る帝す 市の帝法賞よ帝 帝 え 帝 く	市る帝す帝の帝法算よ帝 帝え帝 〈帝 気 神 高 木 堀 蝶 傍 西 大 高 楽 谷 杉 山 江 島 矢 杉	市る市す市の市法算よ市 市え 市 え 市 る 市 表 領 表 会 市 表 編 収 傍 西 大 高 を を が 本 堀 収 島 矢 杉 山 江 島 矢 杉	市る市 法算よる 市 え 市 え 市 る 市 表 算 よく 帯 の 市 法 算 よく 帯 の 西 大 高 気 柳 神 高 木 堀 戦 り 島 矢 杉 山 江 島 矢 杉 木

お 日 つさま 12 7 ま わ 1 嘘 0 な 1) 暮

神戸市 浜 牧 人

割 0 たり二を掛け たりの 共稼ぎ

で

西 11 わ を

西宮市 若 本 多久志 茣蓙

12

て融通無碍を識るのなり

7 " 11 " と笑い とばして死なん 哉

に走って真実と並ぼうか 羽曳野市 峠 可 動

H Iを閉 U た闇そのままになるこわ 大阪市 JII 3

弘

生

直線

きよう一 日笑わなかっ た守衛 松原市 垣

史

好

大阪市 江 城 修 史

合鍵 の温きに触 れて女滔ち

大阪市 小 出 智 子

鬼の

紫を着るには心貧しすぎ

神戸市 仲 どんたく

うたかたのごとくOL来たり去り もれる砂に怒りの 音がない 倉敷市

粉

Ŧ

は割愛)

指

市 藤 井

> 日生きるてだてへ 蓑虫揺れてい る

明

八尾市 飯

悦

郎

貧乏に勝てとは無情 0 第三者 兵庫県 遠

111

H

住

の糸恋にたわむるの 富田林市 もか かり

美

代

蜘

蛛

0 くりとこはぜ止めている迷い 大阪市

坂

形

水

功

K ル 増える狸の木の葉とも知らず 高槻市

柳

潮

花

人世 の幕七分降り八分降り 大阪市 神

谷

凡

九郎

気違 11 にもならず順応性とい うこ わさ 信 新之助

り多き世 12 なん 0 74 月馬鹿 大阪市 有

偽

八尾市 香 酔

K

句、六句以上は三句、編集部選で追加発表しました。表(三回)の中から、二句以上の候補句は一句、四句※以上の句は路郎賞最終選に残ったものです。以下 面かぶって鬼になる強さ 以下は中間発 四句以上は二 一句

八尾市 高 杉 鬼 遊

労わりの言葉を待たぬ耳でよし 滔 どの 温 心すでに妥協し 散ることの出来ぬ造花を拭いてやり 三角 台風 また坂を越えて夫婦の歩が揃 見破られそうで仮面 十二月小鳥の水をまた忘れ 有難うて有難うて酔うより他になし 炎えること忘れて夫婦茶漬け食う 正しさの通らぬ世なり石となる 魔 かい言葉探がしている別れ 々と心に流 10 顔も一対一の肩を組み 禍こ の底で女は行き詰り になる母 0 青 れる河を持ち の鼾を聞く安堵 空の ている迎え傘 偽善 0 むずがゆさ 富田林市 神戸市 大阪市 八尾市 倉敷市 倉敷市 松原市 () 谷 仲 小 1 宮 木 水 出 儿 粉 村 垣 どんたく 弥栄子 克 智 弥 Ŧ. 史 枝 子 生: 翁 好 おん 向うでも受話器を包む深い仲 真 腕 よく稼ぐこはぜは男にはずさせる 燃えきってからも女はバラを抱き 直 子の ネオンに強く紫外線に弱い肌 石 たくらみのない牛の瞳 云うならば空気二十五年の二人です J 近視乱視色盲両眼が開いてても 一刀彫りのごとく処理するおそろしさ 実を求めて渡り鳥は立 時計はずせば枷の音がする この値 マーシャルどおり残りの歯を磨く 角に曲る人生媚知らず な坂風 嫁を捜す痴漢と云うなかれ 10 金のねうちの の指図で木の葉降る ない世 の澄みきって 新宮市 鳥取県 大阪市 八尾市 大阪市 大阪市 5 大阪市 なり 大 香 神 矢 111 信 城 谷 尾 木 + 新之助 酔 あ 修 村諷 凡 九郎 10 郎 K 专 史

デモ隊の歩道越しなるおでんの灯	皇后さまも女 ハンドバッグ提げ	叩きつける言葉の一つあたためる	こんな時救われる夫の無関心 木	髪洗う妻が女に見えてくる 大阪市 河 野	その女もう挨拶も他人めき	甲斐性ない親に似て来て叱られず	おしろい花咲かせて縫物上手なり	濃い緑一色となり塔沈む 富田林市 岩 田	すまんなあと妻へ素直に云えた幸	楽書きの数字も今すぐ欲しい額
醉	逓	三夫	水	君	夾	天	文	美	いわを	鹤
夢	児	夫	客	子	詩	笑	秋	代	を	丸
持ち過ぎたのか冷たい人になり	落語家の汗を見ていて笑えない	抱き寄せる腕は仏の安らかさ	引き金を引く指 神は給わらず	正義感までそっくりという通信簿	阿呆になることも忘れぬ母達者	結ぶ実は土のぬくみを疑わず	新年のレール真っ直ぐ描こうか	軽石の主張浮いたまま放つとかれ	山を抱く雲ふんわりと母の膝	変身のきざし娘の眉細くなる
東大阪市人になり	笑えない	1	-dr	正義感までそっくりという通信簿	阿呆になることも忘れぬ母達者	10000	新年のレール真っ直ぐ描こうか	軽石の主張浮いたまま放つとかれ	を抱く雲ふんわりと母の膝	
東大阪市 竹	大阪市 天	野	ず遠		斉	JI]	奥		を抱く雲ふんわりと母の膝	板

大阪市 川 口 大阪市 川 口 でのみを云えば褪せる日のこわさ (一般の部) 島根県 堀 江 めでためでたでひとり娘をもってかれ	大阪市 河 股 緑 水	腑分け見たいに指かけてチャック引く	豊市 戸田 古 方	ふところ手金に困ってるとは見えず	宝塚市 傍 島 静 馬	生涯をしばるダイヤを軽く受け	堺 市 高 橋 千万子	人の世の汚れた人へ雪は降る	青森市工藤甲吉	間に合わぬのが親方の肩をもち	愛媛県 村 上 旭 童	逆転のない人生の鍬を振る	広島県 高 橋 鬼 焼	華やかさみんなさらって嫁にゆき	島根県堀江正朗	ひとりの寝酒しじまは限りなき	出雲市 尼 緑之助	辞退した椅子へライバル来て座り	倉敷市 小 幡 里 風	くすりにでもするよう麦を作っとり	今治市 越 智 一 水	紫蘇の香のただよう厨妻の幸
	さし出して見せる青春持っていず	八尾市高杉	新世界香車が一つ落ちていた		先生の愚痴とも遊ぶ僻地の子		廃坑のざくろ夕陽に熟れ急ぐ		京都には京都の素足ばかりなり		糸切れた凧が自由を見失い	山県	風		鉄骨の夏雲湧かすエネルギー		めでためでたでひとり娘をもってかれ		(一般の部)	みを云えば褪せる日のこわ		遠距離の父の電話のやさしさよ
		力		欣一		かつみ		葉子		雅堂		千代香		つる		のぶお		芳子			弘生	

花言葉もない雑草でなお可愛い 内 芝 とし j Ш 頂 に住む残照を一人じめ 堀 江 芳

弘前市 小山内 貞 男

一十過ぎ横に歩くのもおぼえ

Ŧi.

島根県 堀 江. 芳 子

ふたりって素的なことね老いてなお

大阪市 谷 葉 子

花祭り花の心は盗まれず

業ひとつ繕っている手術室 東京都 宮 崎 美津子

色があるかぎり花は咲きつづけ 岡山県 武 元 柳 子

今 西 寿 子

雷を遠くで聞けば 丸 10 音 虎

和歌山県 ふきあげ

城

米子市 福 島 城

Ш

病窓の雲ちちになりははになり

紙人形創る夜男の

匂い

消す

島根県 榊 原 秀

旅人へ旅人が道問う嵯峨野

子

花冷えに足袋の白さが痛いほど 守口市 岸 本 豊平次

保険断

れば恩師の顔でなく

今治市

伊

藤

郎

子

失対を養う草がちやんと生え

ぽかぽかうきうき野路をぶらぶらり 内

藤

ますえ

大阪市 小

葉

子

冬の思想で重なり合ってる枯葉 谷

着飾った女がやぼったい青葉 Ξ

竹原市

宅

不

朽

日

高

文 甫

片すみで見てる此の世がこわくなり 美しく老いたる人の舞姿 和歌山市 樫 村 ふみよ

熊 野 溪

水

結婚も離婚も同じ判を押し 新宮市

麻 野 図 玄

羽曳野市

順 不 同

川傍柳初篇研究

728 口へ袖あてて昼寝へ棒を引 眠 狐

引く――写生句。 昼寝の、おそらく男の顔に、墨などで棒を昼寝の、おそらく男の顔に、墨などで棒をられたない要心に、袖で口をおおいながら

違って、ほほえましい情景だ。 藤井―賛。乳母や下女の昼寝のいたずらと清=ひげでも書いているのであろう。

う。 高須=「昼寝へ棒を引き」という表現は、 高須=「昼寝へ棒を引き」という表現は、

23 口ハ四郎奥にハ九郎で賑かさ丸・岡田=礎稿に尽く。

代で詰めた)が、主として遊女の逃亡に監毎月十二人ずつ選出され四人ずつ一日三交毎月十二人ずつ選出され四人ずつ一日三交のとは、大門の入口で、その右側に番所がられて、大門の入口で、その右側に番所がらい、大門の入口で、その右側に番所がらい。

200次 社で、左側の奥隅のが「くろ助稲荷」であるに吹 社で、左側の奥隅のが「くろ助稲荷」であるに吹 社で、左側の奥隅のが「くろ助稲荷」であるがら った。

九郎助は化けて出たがる願も有り 九郎かへ代句だらけの絵馬を上げ 初2

清=四郎兵衛と九郎助の二つの名を黒白になど、遊女の信仰があつかったのをさす。

高須=五郎・十郎を一つずつ少なくした四郎・九郎と、白・黒とをかけた面白さをねりとついていない。ただその洒落だけの句丸=礎稿に賛。「ロ、おく」「しろ・黒」の洒落だけ。

730 岡田 是が一

水

砥

湿 是が一徳と四人り出来心

22 ウハ**弓**

互に蹴り渡した遊び。さきの「損の仕つい人か六人、または八人で、七・八寸の鞠を岡崎=この「四人」は蹴鞠仲間、蹴鞠は四

岡 前 田 井 崎 喜 重 代 人 高 高 丸 岡 JII 須 端 田 啞 柳 = 甫 府 味 風

をもっていたからこそ、帰りには女郎買い の機会もある。一徳があると屁理屈をつけ の機会もある。一徳があると屁理屈をつけ

へくり込むこともできる。 へくり込むこともできる。

高須=「是が一徳」とあるから、これは止 だあと、吉原へ行けるのだから、これは止 だあと、吉原へ行けるのだから、 現代の麻

731 一ト塩すると実は丸・岡田=礎稿に賛。

労をさせると、道楽の目もさめて実直な息外をさせると、道楽の目もさめて実直な息が子の浜へやって塩風にあたらせ、一応苦め子の浜へやって塩風にあたらせ、一応苦いたどら息子の落ちつき先と決っていた。200 秋 紅 一ト塩すると実体に息子成り 秋 紅

て何をするのか、或は何をさせられるのか清=賛。勘当息子の配所は銚子だが、銚子子になる――。

だったので、銚子で別に何をしたとか云う ちょっと塩をふった程度にとりたいが…… しまったか?一塩と軽く言っているので、 らいではないか。やはり銚子までやられて 高須=「一塩」は「きついキュウメイ」ぐ 意味はないだろう。 子が配所の月を眺める代表的な地名が銚子 かえるのが常道となっていた。 銚子のさる家に預けて、当分の謹慎、一年 魚を一塩すると身もしまって、保存し易く 藤井=礎稿に尽く。一ト塩がきいている。 年して改心の涙を見て許されて江戸に 身も心もだらけた息子を勘当して、 即ち道楽息

丸=高須・前田説賛。 にあり、次の類句がある。 れる意。この句の焦点は実体 実体になったを聞けば丸裸 実体な息子親仁うそをつき 実体な息子汁かけ飯を食ひ (じってい) 五拾一 玉九十四 3 1022

前田=「一塩」は高須説をとる。仕置きさ

岡田=同。銚子までは考えないでよろし。 遣手が表徳金笑とつける

遊びの連中にも通人めかして、この雅号を 吉原の遺手婆々アが表徳をつけるとなると 岡崎―「表徳」は俳諧師などの雅号。吉原 つけることが流行、雅号で呼び合った。俳 に都合がよかったからでもあろう。さて の運座があるとの口実で、家を抜け出す 34 オ

> る会話があるから引用しておく。 清一赞。 「金笑」がもっともふさわしいだろう。 さしあたり花一分に喜こぶのにちなんで 「遊子方言」に遊人が表徳をつけ

36)と同工異曲。つまらぬ句。 藤井=「聟の表徳を帰柳と付る也」 から番景さん番景さんといふやうになる 番景とつけよ。後にやおれがやうに方々 お付相成てくだされませ。 んなら、おれが番町の番の字を取って、 すこ」あいどふぞおまへの字を取って、 「通り者」……貴様表徳があるか。「む 「通り者」そ

高須 その時婆ァ大音声で笑い 一分の金があれ程におかし 一替。

玉 6

等の遺手の笑いは金と通じているの の「金笑」とは考えたもの。

30 には実名をかくすイミが幾分あったのであ して得意になったのが第一の主因だが、陰 岡田=遊客が表徳をつけるのは、通人めか 丸二諸説につく。

733 婆々の長咄し壱分くれろ也

岡 清=すでに余分の説明をする必要のなくな ということだった。 事かと思ったら、おきまりの花一分を呉れ らず、もって廻った長話――。結局なんの ||三三会目。遺手婆、なかなか引き下が 34 オニ

いた。 川端一替。一 分もらったら長話にケリがつ

しまぬ。 高須=金笑さん、一分のためには時 小山の如くゆるぎ出て一分とり 間をお

丸 岡田川諸説に尽く。 内の雪隠へ隅田から聟帰り 歩だけ遺手は尻をどたつかせ 泉

分やらずば剝ぎそうな婆ァ也

ニース

七十

らず、真っ直ぐ帰宅。 むのに、入り聟のかなしさ、つきあいもな 帰りに、隅田川から、連れは吉原へ繰り込 岡崎=|向島の梅若忌かねての梅見物などの 34 オ三 河

つかぬくらい。 清=入智のみじめさは今の人達には想像が 隅田川向うの人は聟ばかり

て、号

高須=聟のかなしさ、みじめさもあろう 自意識が強く出てくる。 その家それぞれの臭いがある。 藤井=雪隠とはよく云ったもの。雪隠には 我が家との

や家へ帰るのでなく、自分で家が恋しくな が、律義さも見おとしてはならぬ。いやい って帰る面も多分にあることを考えたい。 聟用を紅葉の下てかぞえたて 智を追はへて白髭で一分かり 二 三 三 35 34

梅若忌に限らず、その沿岸に名所が多い で、四季折々の行楽の場所だった。 岡田―但し、向島へ行くのは三月十五日

確

川柳句集 肉 眼」を読んで

猾さとも時には卑下したくもなる。 奴は五分月代もじじむさい渡世人もどきの狡 相違あるまい。横もみず後もむかずにただ実 故に柳界に名があるとすれば、それは虚名に 話随処に雑文を書きとばしている私、それ 途の人々の多い柳界をみれば、そんな私 柳を作句するでもなく、ただなんとなく

うところ。 るのも成行き、まずはご勘弁下せえましとい その口の端となると手前勝手な憎まれ口とな とえで、一言なかるべき気にもなる。当然、 ものになると、島送りにも三分の理をもつた もっともこのような査問の白州も、自らの

入ろう。もともと俳句なるこの詩型は、自己 の場合にいえることかもしれませんがね。 い。俳句、短歌の大きくいえば短詩型すべて もっともこれは何も柳界だけのことに限らな なら、大事の前に古きを捨てよと申したい。 古くさくていけないね。川柳に人間性が大事 たとえば短詩型の主軸と目される俳句から のっけに一口で申せば、川柳社会はどうも

> 場合とて同じである。 脳がお粗末で質がおちる場合だとあたら作者 力も優れていれば問題ではないが、反対に頭 鑑賞させられる側だが、感受性が豊かで想像 の鑑賞たらざるを得ない。このことは川柳の の意図は地をはらう始末となる。名句も迷句 の想像力に期待してほうり出された作品を、 の鑑賞は貴方まかせである。この貴方まかせ 像力を借りて成立させている。いわば下の句 分近い充足部分を省略してそれを鑑賞者の想 ろで成立している。三十一文字詩型の、下半 完結的なタイプの短歌の下の句を欠いたとこ

> > うと説いている。

この論旨の前に、私はそこに新しい文芸川柳 の存在を必然的に想起せざるを得なかったの

俳句を不完全詩型・不安定詩型としてそこに

「日本古典鑑賞講座」の中で山本健吉氏は

「完結体としての安定を獲る」方向を見出そ

外れな恣意的鑑賞を誘いあげてしまう。作者 似ている。無味乾燥なこの詩型は、必然、的 る。自己陶粋的な甘美なまでのこの抒情と称 芸上の技芸に過ぎないものがほとんどといえ で、まるでプラスチック製の香港フラワーに する情緒主義は、草木的開花ならまだよい方 の作品は文芸上不可欠の「真」ではなく、文 途のしろものを例にあげてみると、その大方 早い話が前衛を自負する詩川柳派の難解一

にとっては、内心噴飯ものの望外な「名 ○ がそこにまかり出る結果となる。

川柳鑑賞のペン先に浮かび上ってきたのが、 …。そこで以上の短詩型詩論の一細胞的私の も完結体すぎておそらく食い足りないのだが を埋めても埋め切れない大河の論旨の展開と 的川柳の一型式がここにあるのだと…。 本誌の橘高薫風著になる最近刊「肉眼」 っとも伝統なり本格なる名の川柳はあまりに なるので、また他日に譲ることになるが、 こんなことを書きはじめると、本誌すべて である。 も

恋人がいま肉眼に入り来る

書名との関連ある「肉眼」の句はこれ 句

(同著「芭蕉」の項参照)

である。完結体としての短詩型、それは近代

高貴なムードがつねに官能の底にある。 この作者は、れもんや紫の椅子の綺羅三昧の いいたいところだ。 果してこの「肉眼」を捉えうる選者は…?と がよくこの二文字に示されている。句会だと 人に賭けた人物が、しかと相手を捉えた喜び のみ。今日一日(生涯かも知れぬ)をその恋 「檸檬」もそうだったが

睡蓮に汗くさき身を遠ざける 金ペンにふさわしき秋灯となる 金環蝕そらエンゲージリングだよ

讃岐富士一番星を簪に

間みる「死」の姿までも持前の官能的だ。 清冽な一人間の風土で貫かれている。その垣 品系列には、人間の俗事の垢は感じられない 冊目にあたるが、全著書を通じてこの人の作 この著者にとっての川柳句集は、今回が三

も、作者の感能がよく示されている。 いのも、今回の句集の特徴だが、その作品に 亡き路郎師への追慕敬悼の句がきわめて多 終焉や裂けてくれない増す拓榴 牡丹雪ゆっくり俺が昇天す

路郎忌に炸烈したるカンナの朱 老詩人ひとり渉らず天の川

路郎の忌 蓮の花は一茎一花 恩師の忌 睡蓮水の旅つづけ

が私の感受性につよくこたえてくるのである それだけに、ひとしお人肌濃いつぎの作品

この人は旅の孤独の好きな人だ。それだけ 路郎忌に松の洩れ日のなつかしさ 恩師の死手にとまる蚊をただみつめ 恩師の死その夜眠むしとも眠むし

> 10 叙景句のものは誠に小太刀の冴えがある。 尾道や今見下せし船に乗る 大文字恋のはじめのごとく点く

足摺の雨は遍路へ地から降る 遠き火の小さく濃ゆし大文字

霧這えば杉の樹間の正しさよ (浄瑠璃寺)

型が単調一途の伝統川柳の近代感覚を呼び起 されていることによろう。この完結体の短詩質の表現技巧でもある起承転結が一句に凝結 る。この知的な十七字への昇華は、文学の特 手腕は、わが柳界でもユニークなものであ の情緒主義を、高度な詩章で捉え切ったその と第二句集「檸檬」で記されたが、川柳文芸 路郎先生は「視野無限、この言葉に尽く」 塔の朱の水に映れば浄土の朱

ているともいえる。 裏切られあたたかきもの放尿す 捨猫とうなだれがちの向日葵と

昼顔へとどきたけれど波の舌

ジンフィズ美人は美徳だと思う 猫柳亡き人ばかり思われる

感動をともなわぬ既成川柳への、 お元日日本人の眼の黒さ 一種の活

は前例句五句目の「眼の黒さ」にある。

学問の跡形もなし小商人 長靴の片方どうしてもこける

動々と水かけ不動恋の垢 火口湖からわが眼鏡から霧生る 逢いに行く心の中の首飾り

> どうつけて貰えるかに、この人の明日の成長 ことになりそうである。五分月代の渡世人的 私にとっては、その「俗の垢」の厚味を今後 味合いは、まさに彼の場合はこれからさきの 味」を説いた詩的経験の世界に生きた芭蕉の を想わせるものがあるが、「行きて帰る心の といえる。俳諧の古典にさかのぼれば、 郎師のそれに近い。だが、その叙法はどこか と彼も作句にこと寄せているが、その柳眼 つねに絵画的な清新な色彩感覚に溢れたもの モチーフは、彼が最も愛惜思慕してやまぬ路 **橘高薫風はまぎれもなく川柳作家である。** 石くれも三つ積んだら思惟の塔 牡蛎殻におのずからなる波の縞 切株の俺の五年と子の五年 蛸の足こそ親しけれ

肉眼」刊行記念句会に

した。 のよろこびでした。ありがとうござい 柳友が駈けつけてくださったことは最高 拙著刊行記念句会に、先輩及び各地の

「句集へ歩みつづけたいと思います。 この感激をたいせつに抱きしめて、 ありがとうございました。 第

風

句、いい川柳を鑑賞する喜びの一ときを味え があるように思える。ともあれ集句四百五十

たことに、薄汚いこの渡世人は酒の味を格別

にしたことだけを特につけ加えておきたい。

平凡 勿体ない勿体ないというも年 今の世に販路まだある家伝薬 妖艶な身内も知らぬ通夜の客 瞿鑠と散歩してたが会わずなり 金というものに後押しして貰い 鼻環だけない文明の僅かな差 今日も又演技に疲れ果てた酒 メガホンでわめき塗る気の同じ色 恩師会うたびに細君 パ若く男の化粧品もいり なくらし 平 和 な句を作り 元気かね 和歌山 石川県 秋 村 根

É

星

虹 宏 要 方 買うてきてモデルと同じポーズとる 相槌を打たねばならぬ位置に居り 中 素人の悲しさ駒をまだ投げず 仕込んでるつもりいつしか飼 絵に画いた餅のプランがお気に入り 日の丸の赤を血潮とみる人も 三猿で通し悔しさ嚙みしめる 経験を問われてもただ耐えたの 定年だそうなネクタイ派手な柄 爪赤く土を知らない足である 引き金も教育勅語も知った父 末席は採 たし 泊の旅へも女である荷物 年の恋シグナルは青ばかり には似 決の時見渡され ずスマートな影 尼崎市 一重県 がぼうし 育され 中 岸 Ŀ 谷 本 富 利 豊 4 子 美 次

負けん気の今日おごそかに地鎮祭 骨壺をふれば毒舌とび出そう 聴診器心重たい嘘を言う 腹立てている膝孫が来て座り

> 北 111 春 巣 選

ショルダーに仕舞きれずにいる妬心	岡山県谷	方便の嘘がつけないいじらしさ	心眼に秘密は持たぬ夫婦箸	こんなとき神を心に持つ強さ	また立って座って受賞胸が鳴る	島根県堀	美術館羅漢のような守衛いる	東京の谷間蝶々が飛んでいた	花作りやっぱり妻のお人よし	人不足ここも婦警の大根足	大阪市 堀	遺児抱いて女盛りを過去に生き	素朴な安らぎ母の居る田舎	帯結ぶのにお隣りのおばあちゃん	資金メド付いて転業の肚をきめ	代読がすめば庶務の平社員	東大阪市落	うこぶんの捨て場この胸空けてやり	がよろこべてもうこんな齢	会旅のシャッター押	日とはこんなに長き	四六時を生きてるしるし揉みに揉め	東京都宮	ちっぽけな抵抗 みそ汁がからい
	Ш					江					П						合						崎	
	渥					芳					欣						思						美	
	子					子					_						月						津子	
枯葉舞う視野に未完の心抱く	大阪市 小 公	チグハグにマニキユア光っている女	ファールするように三度目も破談にし	灯下親しむわたしの週刊誌	海路の日和待ってただただ老いるだけ	神戸市 佐々士	盲もよし故郷の山河もとのまま	こともなげに子は赴任する地球の裏	白い目をして同じ服すれ違い	肥りすぎだけが苦労の昼寝つき	大阪市 本 問	大根のすだれも見えず秋深む	底辺の気楽さ見上げる星がない	静かなる愚痴を悟りと誤解され	友情へ押す実印のむずかしさ	八戸市安田	嬉しいだけの下戸に金盃	この俺がグラフに化けた心電図	出世したのはおとなしいクラス会	どの山の紅葉でもよし罐ビール	今治市 原 田	同窓会ゼニの話をして別れ	忌惮なき意見を求め腹を立て	切札は時の流れという妥協
	谷					木					間					田					田			
	葉					静					満津					勝					輝			

己

親

子

泉

ミニもあり浴衣もありて盆踊り	新潟県市	なつかしい写真整理の手がとまり	不義理にも同じ笑顔で迎えられ	冷房の中でモデルが冬を着る	和歌山市 樫	湯の町の朝はゆうべの顔でなし	取らぬ狸を銀行がもう狙い	飲む用も入れて忙しい忙しい	新潟県 高	貧しさは何でも両手でつかむくせ	落葉の舞いにことしも秋がきた城址	秋の女冷たき唇を紅く塗る	大阪市 阪	再会に燃えるものなき四十かな	掌の血豆ですんだ今日の無事	職人の良心予算に押し切られ	竹原市三	御機嫌のとり方聴いて今忘れ	口銭のない世話育ちの気を安め	残りめし捨て気持ちよい娘に育て	米子市 石	春そこに甘酸っぱい花言葉	追い風におわれて初春の楽譜買う	別れの顔モナリザには遠く
	Ш				村				野				上				宅				坂			
	_				J.				不				+				不				新			
	峯				みよ				=				止庵				朽				雪			
子供悲しやコンベヤーに巻き込まれ	高槻市 竹 内	人災と悔まれてまた幾柱	欠点を探すのが欠点の離婚歴	ロートレックも写楽もわかる年になり	茨木市 吉 川	我が道を行くことに定め受ける酌	プールサイドおヘソの個性見て楽し	急ぎ物へ仕立へ汗も二三滴	羽曳野市 麻 野	新婚は一人も見えぬクラス会	脱税の友が大きく見える日々	マンションに住んで芦屋をふりまわし	川西市 氏 林	鏡との対話に勝っている化粧	愛される順序が違っている妬心	よりどころなきを笑顔にしてしまい	和歌山県 ふきあげ	ジーパンの似合う禅僧庭掃除	九十九折りヒヤヒヤさせて良い景色	化粧室優越感がひしめいて	和歌山市 垂 井	足る足らず心に秘めて五十年	金 婚 式	元地主ひっそりと棲む老二人
	花代				米				幽				洋				虎				千寿			

上役の見舞寝衣のエリ正し	試歩の庭車椅子まで腕を振り	堺市 栗 本	物忘れバランス取れてきた夫婦	複十字吹けば飛ぶ寄付して帰り	法悦に浸る御縁を病みて知り	大阪市 小 谷	インフレはへそくりなども吹きとばし	坊さんもストをやりたい物価高	工場も一つならばと過疎の村	島根県原	潮騒に胸のシコリを砕かせる	リンゴの赤く色づいて里平和	重箱の隅だけつつく管理職	青森県	合理主義仮面をはげば非人情	ひたすらに生きて自画像いとおしむ	アイシャドウ落せば膝へ子がまとい	和歌山市 仲 原	行き屈くもてなしちょっと気が疲れ	安物の指輪が光る酌で酔い	肩書はなんにも言わず名刺置き	青森県 荒 田	葬儀結婚レジャーと秋のせわしくて	眼鏡はずして近眼年を取り
		藤				清				美				た				己				つ		
										枝				だ										
		持				女				子				お				恭				3		
秋の陽の色で熟柿として燃える	ちちろ鳴く老いて悔なき机あり	年寄りの足に巻きつく物価高	新宮市 城	胸に棲む方にひょっこり訪ねられ	のんびりと浮子に心をあずける日	龍宮も移転をしたい海となり	和歌山市 内	居心地をほめて退院またのばし	福祉国家ダウンしそうにナース居る	曼珠沙華恋の炎にみえてくる	大和郡山市 森	連休の疲れ役所で回復し	酒なしの会議と見抜き委任状	パン食いで一等とった妻の口	青森県田	ペタル踏み今日も流れの列に入る	御値段も目を見張らせた衣裳展	秋日和良心を買う無人店	守口市野	議員逝き表札まだまだ生きている	手を引くは祖父か孫かの通学路	税の伸び納めた心がわかるまい	大阪市 横	ミニの膝並べ見舞がよく喋り
							芝				田				沢				呂				地	
			丹				とし				カズ				っと				右				正	
			鹤				よ				エ				む				近				彰	

平社員へ義理人情の浪花節		テレビ料理香りを伝えるほめ言	夫婦して敬老会に錠し		親友を裏切る陰に居る女	もろ肌を脱ぐ友情へ背		乱れ雲裂かれたように父老い	横向いている善人の楯となり		神技のように打算のル	人生の門出値上げの波		名士の娘だけに週刊誌	国訛り団体で来るおみやげ屋		機動隊今日はお祭り警備する	しとやかな夫人で酒がはずま	台所に減食宣言貼って		警官のロボット着替え	味覚の秋血圧料理の時	過疎きびしきびしとコオロギ	
花節	橿原市	~るほめ言	して出	寝屋川市	女	、背を向ける	岡山県	父老いぬ	品となり	備前市	リジュ	以に乗り	今治市	心で騒ぎ	やげ屋	大洲市	層備する	かはずまな	ってある	豊中市	替えのほしい	味気なさ	一オロギ鳴	宿毛市
	西	葉		福		11	永			武	引く		渡			堀		()		安	服		鳴くような	Щ
	本			富			宗			内			辺			内				藤			な	本
	保			隆			宗			雅			伊津			暁				寿美				窓
	夫			子			義			堂			志			風				天子				花
来年を約して農機の油拭く	中年の話題は我流の庭造り	兵庫県 高	ざくろの実なにか言いたいような口	タコの糸どこまでとける好きな人	島根県岩	百才を生きればニュースの顔となる	斗争を宣言 男の顔となる	姫路市 大	願いましては一銭也を待つデノミ	信仰をしても物価は下げられず	大阪市 平	不調法ですのと大きい方で受け	ぎごちない酌も嬉しい帰省の娘	鳥取県 林	夕焼けがこんなにきれいと思う幸	俺なりに生きる手相をジッと見て	名古屋市 大	楽しさは犬も知ってるマイホーム	知っていて知らん振りする難しさ	河内長野市 井	本山のおかみそり受け名もかわり	散歩道むだ歩きする気の弱り	大阪市 新	平社員せめて心を広く持ち
		橋	3.5.7		田			原			井						林			上			JII	
		近			Ξ			葉			露			露			曲			喜			貞	
		江			和			香			芳			杖			ん手			醉			祐	

趣味は仕事黒字家計が言わしめる腹芸が出来ず技術屋出世せず	完成の目前資材も金も切れ 寝屋川市 江 ロージャー 日本風呂が待ち	湯の街エレジー誰れかが泣いた過去をもち集団就職都会に馴れて赤いシャツ	無事祈り三ツ星見える部屋に寝る かと我にかえり死仕度に気付き	台所今日のスタミナ作る音 と ながり等言うとらず	山 ^る)	徴兵年語って旅の友となり 顎を掌に乗せて自分をもてあまし 青森県 岩 淵	薬屋が大人のオモチャ添えてくれ アリバイは土産袋に語らせる 岡山県 船 越
貞		保	芸	静		映 一	周
男	度	子	太郎	子	· 子)	輝 星	歩
長生きの夢を消された物価高秋の風冷え冷え物価高つづく	子の育ちママの知らない二進法ハネムーン二世契るなど思って	文化への抵抗薪風呂をたく 文化への抵抗薪風呂をたく	みの虫の寒きをこらえる衣替えみの虫のことろくら闇で夢を編	ユックリズムひびの這入って居2 正面は笑って焼香見てござる)胸打つ恋がまだ若い ・ ・ のおったがまだ若い	遺句(運転歴35年無事故なのに2 訪問に着物を撰れる暮し向き 竹原市	暮しから生れた言葉いぶし銀 で得たいたわり見せる聞き-
生きの夢を消された物	の育ちママの知らない二進和歌山	り立つ男黙秘の	の虫の寒きをこらえ	ックリズムひびの這入って居る身面は笑って焼香見てござる	妻と長き月日へ解けてゆき 騒の胸打つ恋がまだ若い	遠句 (運転歴35年無事故なの に着物を撰れる暮し向き に着物を撰れる暮し向き	を得たいたわり見せる聞き上手から生れた言葉いぶし銀
生きの夢を消された物価高の風冷え冷え物価高つづく	の育ちママの知らない二進法ネムーン二世契るなど思って。	り立つ男黙秘の前に負け への抵抗薪風呂をたく	の虫の寒きをこらえる衣替えの虫のこころくら闇で夢を編っ	面は笑って焼香	妻と長き月日へ解けてゆき 騒の胸打つ恋がまだ若い	遠句 (運転歴35年無事故なのに2 に着物を撰れる暮し向き に着物を撰れる暮し向き	を得たいたわり見せる間 から生れた言葉いぶし銀
生きの夢を消された物価高の風冷え冷え物価高つづく	の育ちママの知らない二進法和歌山市 津	り立つ男黙秘の前に負け への抵抗薪風呂をたく	の虫の寒きをこらえる衣替え 羽咋市 三	ックリズムひびの這入って居る身体面は笑って焼香見てござる	妻と長き月日へ解けてゆき 騒の胸打つ恋がまだ若い	遠句 (運転歴35年無事故なのに追笑されに着物を撰れる暮し向き 竹原市 古の人ふとよぎる目に葉鶏頭	を得たいたわり見せる聞き上手から生れた言葉いぶし銀

大阪市大	一人っ娘が嫁ぎ笑顔の消えた秋	豊橋市 鎮	錦帯橋外人さんに撮ってやり	宮嶋旅行	貝塚市 行	年金が殖えてまだまだ死なれない	倉敷市 津	大和路はかがしが柿を売って居る	たのしさは雅号ではがき出した事	大阪市 鈴	失恋のわりに食欲おとろえず	目を覚ます不安現実のしかかり	鳥取県 大	手不足へ腫れ物みたいな人使い	10	和歌山市 吉	酔い醒めて帰りは寒い秋祭り	お互に齢と主治医が慰める	今治市 古	卵から飼うた鈴虫寝付かせず	良いプラン金は他人に出させます	今治市 今	武家門をくぐってミニの娘が戻り	コレクション柱時計がチンと鳴り
国		浪			天		田			木			坪			野			野			井		
た		翠			于		耕			生			天			富			伶			松		
かし		月			代		水			仏			涯			子			人			花		
電話ならこんなにしゃべるひとなのに	松江市 西 田	クリスマス雪が降らずに雨が降り	堺市 檀 野	秋深し紅葉の錦虫の声	大阪市 村 島	毒舌を吐いてお世辞で埋め合せ	大阪市 花 田	バスの旅調子はずれの歌もよし	大阪市 須 浦	向い同士歩道橋出来で疎遠がち	大阪市 吉 野	留守の間に丹精の菊盛りすぎ	大阪市 広 畑	女だけで幟を建てる過疎静か	新見市 吉 田	雨漏りのリズムへのんきに寝てしまい	鳥取市 有 田	親と子の望みをいれて部屋小さく	倉敷市 高 山	給食費上りおやつの格が落ち	須賀川市 平 栗	計報うけ淋しく礼服出してゆき	鳥取県 福 田	物価高パパの小遣い減らされる
	溥		茂		秀		繁		つ		志		賛		落		鹿		み		金		陽	
					-3		215				16,		_				0		ど		太		120	
	子		子		村		子		ね		津		212		猿		子		0		郎		Щ	

極 悪 0

西風

の音に日本列島祈るのみ

生きながら地球にむかいさようなら

高 藍 再 鈍

水に字を書く彫刻師 とんねるをくぐるデコー 超自然どうにもならぬ人の知慧 民主主義神を畏れず人を怖れず 極悪の ぼく神様よりは人が善い 待ち呆け

埋没の上に埋没する世紀層 宇宙に地球の霧散やるせない 人間と宇宙とかかわり合をもちましょう 海陸は水と土との共倒れ

濤々と氷河時代がやってくる

花の翳から模様変えする性器 発止と流れは思弁の揚棄 天に昇り地に潜る二千年 土人さながら熱砂をあるく汗りんり 逆立ちときずいたときに地へ滅入る 土人となって天然の風にくるまる 抵抗をするシンボルの旗下る ップの中で元帥が傀首れる に塵芥を捨ててどうなる

門人句集工柳塔社 JII 柳 塔

同川

路郎忌句会当日発行 昭和49年7月7日

福

井

野

迷 路

7

をゆさぶるものと教えられた。英国会議場で 昔教えられた要点はワッハッハは禁物、閉じ 猫や坊ちゃんが生れた。 村が三高京大で口を酸くして講じ漱石からは た口を歪めて笑顔を見せる程度で而も永く心 ることは夏目漱石が昔の一高東大で、厨川白 モアはアングロサクソン特有の文化た 両師から六十二年の 信する。 しめるものが川柳文学をおいて外にないと確 と引きとめて、本当のユーモア文化を定着せ れて居る。 だよいとして若者の痴笑がテレビで毎晩流 両文豪が昔汗を流した切れた凧をしっ 剰さえ我国にはも一つ次元の低い落語はま

ユーモアへ翌朝も一度微笑させ

反対党を攻撃する時もユーモア文化の笑顔で

日本の国会と正反対だ。

建設時期 建設地 ★碑に刻むは 八木摩天郎句碑建設 『ふるさとは大仙陵のあるところ』 昭和四十八年十二月二日 堺市大仙町仁徳御陵前広場

西 金婚祝いとしてご寄贈 H 栄さんご夫妻 金五万円

☆南大阪川柳会へ

公金 ☆金 金 一 封 福田丁路氏から本社発展費として 梅谿庵不酔氏から本社発展費として

☆厚く御礼申しあげます。

た。なお東大阪川柳会の十二月二十二日より東大阪文化連盟から表彰を受けられ三日(文化の日)川柳に尽された功績に三年(文化の日)川柳に尽された功績に「東大阪市同人」は十一月 は同氏の受賞記念句会となる。

第8 岡山県川柳大会

かり

主催・白百合川 9 時開場 柳会一

郎氏。(詳細次号に発表) 場 所 岡山県邑久町区館ホール 「邑久町公民館ホール の山県邑久町尾張 柳話に川 ル 川村好催

11 山造六十九次 (1) 窗七野鞍馬

52 鵜 沼

里あり。 ま)の市(いち)とも云う。 ここより尾州犬山の城見ゆる。名古屋へ七 宇留間(うるま)とも書く太田から二里(七・九キロ 路のここをうるまといふ事は (うるま)とも書く、又売間(うる

八月二十八日、山鉾数箇有、挿絵に描かれて 南二キロ犬山城下に針綱神社あり、 行かふ人のあればなりけり 例祭は 源重之

53 加

亀姫を妻にもらった。 功により加納城主十万石となり、家康の長女天正三年(一五七五)奥平信昌は長篠の武 町長し、又商人多し、岐阜へ一里、町続き 当城主永井侯三万二千石を領せらる。 鵜沼から四里八町 (一六・六キロ)

> 寺に信昌、亀姫夫妻の墓がある。 に編入されている。 納には奥平町ができ、そこの久昌山盛徳 今は岐阜市

54 河口 渡さ

一町ある。 加納から一里半(五・九キロ)宿の東端に

長良川の鵜飼

と芭蕉は詠んでいる。川柳は、 綱をさばき、鵜をつかふけしき、又めづらし。 明を照らし、船のめぐりにさし出し、鵜飼の 一人して鵜を十二、三羽もつかひ、鮎をとら 鵜飼船は、長柄村より尾州侯の命令を受 暮かたより河上に漕のぼり、 いと興あり。と図会にあり、挿絵もある。 おもしろうてやがて悲しき鵜ふねかな 鵜遺ひの灯をともすにもくせがあり 闇の夜に松

鵜の首は案に相違な所へ出る 鵜の 面は凡慮の外な所へ出

松鱧(11029

長篠の武功は御意に加納なり

春風 (一〇一4)

鵜造いの夢にしょくしやうたのもしき (宝十三義4)

鵜造の付木持手も振上る 遺ひの四十を越えて渡し守

(武十33

女房もつみを手伝ふ鵜のかがり (武六2)

めらる。(図絵)山の城に織田信長公移り給ひて後、岐阜と改 むかしは斎藤竜興が居城なり。それより稲葉 岐阜は、周の岐山になぞらへて名付し所也 出館 (10五15

の秀信が居たが慶長五年(一六〇〇)亡ぶ。 織田信長に攻め滅された。天正四年(一五七 が、永禄十年(一五六七)その子竜興の時、 道三は油売りから成り上ったというので、 稲葉山の城は、斎藤道三の居城であった 信長が近江の安土城にうつって後は、孫 油売りでも仕出したは道三 玉章 (三九16)

美濃油しぼって継だ稲葉山 尾張勢は信長

尾張勢先づ油屋をせめつぶし

五五12

斎藤道三くれ方に来た人 油売りは日暮に来る 春風(八一6 (安七智4)

40

油屋は二代生薬屋は一代 雨潭(傍四34

三は二三里にげて脉をとり 生薬屋は小西行長

岐阜は提灯が名産で、 軒口に七草のさく岐阜の町

猿松(九八12

芝鶴(九九27

屋のはめ岐阜と桑名の国境 提灯のもよう

錦糸(一四〇19

稲葉神社が挿絵にある。

沂

詠

55

相対して巷をなす、 河渡から一里六町 余は散在す (回 [·六キロ)

名産甜瓜は北隣の真桑村から産出。 永禄以前に美江寺観音があった。 北方五里の所に、西国三十三番打納の谷汲

いままでは親とたのみし笈摺を ぬぎておさむる美濃の谷汲

谷汲で親にはなるるよふにぬぎ 12

美。

駅中左右

それを川柳は、 (たにくみ) 観音がある。その御詠歌は、

春から夏

江木

一組はお見合と見た菊花展

空ッ風屋台の酒がありがたい 再婚の話もチラと一周

岐阜市

市

JII

鱗

魚

方円の器出世とかけちがい さらさらと茶漬男に ある自 信

週刊誌からの知識で革新派 好かれたい年よりでいる独り

池

吞

歩

売春は禁止資本家には二号 批判する政治の下でゴルフ焼 け

条件を二つ三つ捨て嫁き急ぎ おだてられなめられ死に金使わされ ためす 時見る相場

今治市

長

野

文

庫

秋風

へ個性静かに蘇える

上田

ग्री

金

子

吞

風

愛すでに玩具のように壊れかけ

今治市

月

原

宵

明

振向かず別れる憎い人が好き

背水の陣か女の肝っ玉

酒の量度を越してよし旅枕

軽蔑に耐えた若さを褒められる

坐禅するしじま賽銭の音冴える

大洲

米

沢

暁

明

ビフテキの堅さメニューの値へ折れる

停年延長へ該当一

号にあるみじめ

須坂市

高

峰

柳

児

谷汲へ奉納をする旅じらみ

谷汲へ虱を納めたてまつり 寿山 (一四 19

谷汲で所の知れぬ人になり (四三8

生国が書いてあった 菅子(八一21

谷汲へよくたくはへた鰹ぶし (武十五6) 谷汲をしまひたまごで一つのみ(拾三24 巡礼中は精進

鴬に出て谷汲のほととぎす 晓鳥(三二41

41

百 人 吟

句 鑑 賞

前月号から―

īE. 本 水 客

こおろぎのひげがあわてる膝の上

可笑しさが滲む。 があわてるの表現も適切で、そこはかとなき とした秋の夜の静けさが心にしみ通る。 特異な題材でも特異な発想でもないが泌々 ひげ

水墨の虹は悟りとして架かり

晴とも云うべきか。 虚空にかかった虹のひと描きは、その画竜点 画法は禅の悟りに通じるものを感じさせる。 墨色の濃淡によって万象をえがこうとする Ŧ

炎の輪くぐり抜ければ凡婦かな 井 醉

後段の句調の変化にある。華やかな炎の輪く 的な人生譜を句として成功させたのは前段と性のその後は、鳴かず飛ばずの平隠さ。常套 世間をアッと云わせる生き方をしてきた女

ぐりも馴らされた猛獣のそれであったのかも

鈴虫に死ぬべき覚悟うかがえず

あるからであろうか。 或る種の階層に対する不満が強く句主の心に いない。覚悟と大袈裟な言葉を使ったのは、 く虫には、死ということなどは頭に無いに違 秋も終りに近い冷気のなかで声を限りに鳴 (遺句)

淋しいね蜂も飛ばずに秋の壁

も此の場合気にならない。 凝集されている。上五のやや舌足らずな表現 深沈とした秋の気配が、動かない一匹の蜂に 秋の壁と、いささか俳句的な字句のなかに

山沿いらしう豪勢に降ってくる

が眼にうかぶ。 て雨を詠まれているのであろうが、 何の奇も衒いもない大らかさ。季節的にみ 私には雪

良い酒だったとはお通夜の席のこと

味のことが話題の第一に出てくるのは酒に眼 のない人のいじらしさとも云うべきか。 故人への追慕を忘れた訳ではないが、 暁 酒の 童

足元へにゅうと出て来たかくれ滝

水

観ででもあろうか。

或るときは吊橋の真下に全容を。

らわれる。ある時ははじらい勝ちに半身を、 を響かせて姿を見せなかった滝がにゅうとあ

岩壁をひとつヘツると、トウトウと音だけ

恥ずかしそうな表情を見せたりするから面白

眼を通すと時に眠そうな顔になったり、時に

見るからに恐し気な仁王さんも、川柳家の

まじまじと見れば仁王さんはにかみや

指繰れば冥土の児にも嫁が要り

た親心に昇華させている。 な主題を、嫁が要りと締めくくって泌々とし 死んだ子の歳をかぞえるという謂わば平凡

膝を抱く癖も恩師に似てきたり

られたものである。 主には似つかわしくないように思われる。 ながら話すときの路郎先生は、厳しさが消え て何とも云えぬ人なつっこい眼付になってこ もう少し痩身にならなければ、その癖は句 手のとどくところに酒器を置いて膝を抱き

橘高薫風 第三句集

水 煙 抄

句 -前月号から-鑑 賞

浜 田久米雄

言ですむやさしさが言えぬ夜

詫び、お礼などいろいろあろう。かけてもら る方はてれくさいのか口が重いのかたった一 う方はひそかにこれを待っているのに、かけ 美徳である。やさしい言葉は、いたわり、 空しさ重苦しさがよく表われている。 言が言葉になって出ない。夫婦間の親子間の やさしい言葉をかけるということは人間の

拗ねている六十路おかしさとおりこし

こと請合だ。 ぬ年寄りである。けれどもこれは対抗をせず ひと通り過ごして来ているのだからむしろ達 に拗ねさせておけばいつかは元どおりになる 観をしてもらいたいのにまだご機嫌のなおら 越して阿呆らしくなってくる。人生の経験は いい年をして拗ねるなんておかしさを通り

にやにやとしたのが無口の好意なり

親しみを見せてくれるのである。 とはもっての外である。せめてにやにやとし らべらべらしゃべってお愛想を言うようなこ の精一杯の好意であろう。句全体にほのかな てもやもやした笑顔を見せてくれるのが無口 やべりたくないのが無口の本心であるか のぶお

広がってゆく空想を蚊に断たれ

断されては空想のつなぎもお仕舞である。 の夜の小さな心理的出来事を頂きたい。 の大事な時間をどこかに止った蚊によって中 るときも人生のある幸福な時間であろう。こ 空想は果てしなくつづく。空想に耽ってい 涯 夏

愛情のうすれ盆栽枯れている

と雨が降るか人間が水をやるかしないと生き ているが、可要想なことをしたものだ。 回数が減っていることで私も盆栽を沢山持っ ることは出来ない。愛情のうすれは水をやる 生えているものを鉢に植えて鑑賞するとなる 草木は雨露の恵という言葉がある。 大地に

まわらない首を実家に持ち帰り

実家へ帰れば金策などなんとか目鼻をつけて の句想は昔から随分作られて来たことであり まわらない首が穿っていると思う。 この種 義

ユーモアに似た心のやりとりだ。

肉

眼

題字・藤沢桓夫先生

好評発売中

序文・中島生々庵主幹 千円(送料共)

ぬ首が面白い。 くれるものだ。 発行所 親馬鹿 の前に出ているまわら 111 柳 社

極道の重みを老後に背負わされ

の悪因に対する悪果である。 労している人を見かけるのである。 に放蕩をして来た報いが年をとって表われ苦 は放蕩をして来た人のことらしい。若い時分 な人のように見えるが普通言われている極道 極道とは道を極めると書いてあるから立派 因果応報

防犯ベル女一人の城まもる

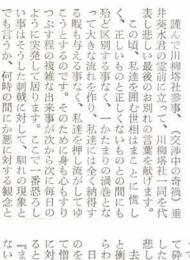
ばならない。恐ろしい便利なベルである。 道。なるべくベルを使わずに城が守れなけれ 防犯ベルを持って歩かねば物騒な女の夜

物価高さわげばさわぐ程上がり

現実でいつまで上るかいつまで続くことか。 みんなが困っているみんなが憤慨している

弔 辞

生 庵



H



111 111 柳塔社常な 井葵水氏急 任理・ま吟 事社 主宰

逝

悲しい不測の奇禍であったのであります。 した。それはとりもなおさずあなたの 向にある事です。 て砕けるような大きな悲報が打ち下ろされま って天空も る日暮らしであるために私 です。言い換えると刺 む中から薄らいで行こうとする。悲しみ、いたわり、あわれむ 正しい判断 一時に破れ去り、 この弛緩した私 この弛緩した私達の頭に向をともすると誤りそうな傾 激 達の頭は麻 の連続に明 地軸も 一瞬にし む悲しい めけ暮 瀬して にある

らわす事の と衝撃はどんな言葉でもどんな文字ででもあ去る二日の朝、この悲報をうけた時の驚き に対してもこうしてあなたの遺影に接してい て憎むことを知らず を善意に解し、 頃 ええがなええがな今更嘆い あなたの温顔は、 、あなたは凡てのものを愛 の出来ないものでありました。 凡てのものを大きく抱擁し く、このたびのこの悲しみ ても仕方の 凡ての 专

将来を嘱 す。 しみを感じます。 もし許さるれば八裂きに りませんが私は心の底から怒りを感じます。 悪魔に対してあなたはどのようにお考えか知 なたを、 達川柳塔にとってもあなたに期待しあなたに 物であり働き盛りのあなただったのです。 又実社会人として、これからが重要な中堅人 です。社会人としてはロータリアンとして、 のたよりであり、 も悲しい愚痴のくりごとに泣きくれて居りま なたが一層悲しいのです。又しても、 とのお言葉も残さず突然姿を消して行 えるでしょう。 る私達川柳塔社の同僚達のうろたえ振りも見 れたあなたにも残されたお家族 るのをどうする事も出来ません。 神様も仏様もないのかとおうらみ申 ようです。し 全くなすところも知らない にわかたぬ慟哭の声が聞こえるでしょう。 さとり切るには余りにも無力である い凡夫にとっては諸行無常等と 言う迄もなく家庭にあってはたった一つ そのあなたを一瞬にして奪 望する事が山程ありました。 そうしたお家族や私達に一こ 父であり、 しても足らぬ いように放心していてえるでしょう。又お家族の方々の日夜をません。今は遠く離 主人であったの ような救 ない去った のです したくな そのあ 又して 程 ったあ 6 の僧 私

診療院の に出 上げて載 『から電話でお見舞下さった。その電話口で載せていたのをお気になさって早速和 た私の家内は、 近くに火事があったのと その時のあなたの たのを新聞 前大阪 お声 でとり 0 私

じゃ

ないか、宿命とでもあきらめて泣

はっきり耳に残っていると今でも涙ぐむのではっきり耳に残っていると今でも涙ぐむの恋話が太茂津さんから好郎さんを経て私の耳に届けられ、呆然としていた今月二日の朝の時間から殆ど10分もたたぬ時間に朝の郵便が配達され、その中にいつものようにあなたが目の前にあらわれたような気がしました。私としてはこの絶筆になった対応しました。私としてはこの絶筆になった対応しました。私としてはこの絶筆になった対応しました。私としてはこの絶筆になった対応です。ほんとうにあなたが目の前にあらわれたような気がしました。私としてはこの絶筆になった対応です。

―中略―あなたは先月お見送なさったばかりのお母上のお膝元から、この哀れな涙に打りのお母上のお膝元から、この哀れな涙に打りのお母上のお膝元から、この哀れな涙に打りのお母上のお膝元から、この哀れな涙に打ちれて御別れに致します。さようなら。 昭和四十八年十一月四日

川柳塔社主幹 中島生々庵

%

願生院文空葵水禅定門

西尾

イタリティという言葉もある。之も亦同

君のために作られたような言葉である。君を知ったのは、まだ数年の間しかない。君を知ったのは、まだ数年の関である。人があった。それが葵水君だった。それがあった。それが葵水君だった。くれとのことで、君の私宅へ伺った。くれとのことで、君の私宅へ伺った。

のお家は、和歌山市内の賑やかな小松原通りのお家は、和歌山市内の賑やかな小松原通りをは思われなかった。開け放たれた。とではなかれた灯籠は苔むしていたし、手前の地水には錦鯉が遊戈していた。ビールのグラスを手にした二人は、川柳の話から俳句の話へとつきなかった。

った。 った。そして八十二翁逸水と署名があいた。そして八十二翁逸水と署名がある字の額が目についた。そして八十二翁逸水と署名があった。

之は僕の祖父さんの字で、この家は もと和歌浦にあった別荘を解体して、 ここへ、もって来て建てかえたという ことを話された。 木地は古いが、門を入った時の感じ から、こうして座っている感じは、正 から、こうして座っている感じは、正 が、の別荘に居る思いで、庭の向うか ら、潮騒の音がきこえてくるようであ った。その時はまだお母さんもお元気 で、奥さんは何くれと接待して下さっ た。それから君との親交が急速に深く なった。それから君との親交が急速に深く

> 下就任されてからの川柳への欲求は爆発した 事業は倉庫業、貸ビル、マンションと手広く やられ、和歌山ロータリークラブのメンバー やられ、和歌山ロータリークラブのメンバー として活躍せられ、趣味の川柳は倦むことを 知らず、新宮吟社の「みかん」のバックアッ 別をされ、大会といえば、山陽、山陰、北陸 プをされ、大会といえば、山陽、山陰、北陸 と足を伸ばされた、そして遂に奥さんも、干 と足を伸ばされた、そして遂に奥さんも、干 と足を伸ばされた。

理屋であった。
理屋であった。
理屋であった。
理屋であった。
理屋であった。
理屋であった。
理屋であった。
理事会の帰りに

機嫌の四五人は入っていった。



最後は十月二十八日の堺市文化祭市民川柳大会の時であって、奥さんと席を列べて座っためうて、隣りに座って、同じ鍋の鳥をつつというて、隣りに座って、同じ鍋の鳥をつつというて、隣りに座って、同じ鍋の鳥をつつ

た。 合 掌 これもそれもみんな憶い出となってしまっ

告別式に参列して暗然と拳を膝に通夜守る

栞

川村好郎

障子一重がままならぬ身とはよく承知はし になが、あの元気だった葵水さんが一瞬の 大茂津さんから早々電話を頂き、驚きと怒り 大茂津さんから早々電話を頂き、驚きと怒り 大茂津さんから早々電話を頂き、驚きと怒り を悲しさとで声も出なかった。十月二十一日 の南大阪川柳会の句会でお目にかかったのが 最後であり、其の節「十一月のわかやまの句 最後であり、其の節「十一月のわかやまの句 最後であり、其の節「十一月のわかやまの句 最後であった。

御母堂が逝去され、その本葬が執り行われた主幹のお供をして私も末席に参列した。先に社の社葬として告別式が執行された。生々庵社の社葬として告別式が執行された。生々庵十一月四日午後、和歌山市阿弥陀寺にて葵

その基盤も出来、主幹のご命で私も毎月句会一年余、其間熱心に初心者を育成され、漸く

起ると予想したであろうか。痛恨と世の無常っていた同じ所で私も永き訣れの黙祷をするっていた同じ所で私も永き訣れの黙祷をするっていた同じ所で私も永き訣れの黙祷をするをにお礼の挨拶をされていた同じ場所に今度

をひしひしと感ぜずにはおれなかった。 しめやかな読経の中に生々庵主幹が川柳塔 を大きして吊詞を感慨深げに捧げられた。 奏水さんの川柳に対する熱情活躍、在りし日 奏水さんの川柳に対する熱情活躍、在りし日 の思い出を膝を交えて葵水さんに話しかける ように、急逝を悲しみ惜まれる主幹の真情の ように、急逝を悲しみ惜まれる主幹の真情の ともった一言々々に私たち聴いているものも ともった一言々々に私たち聴いているものも 思わず涙が頬をつたうのであった。ふと見れ ば奥様干寿子さんが伏目勝ちにジットせき来 る悲しさを押さえていられるのか、最近撮られ たな思いで聞いていられるのか、最近撮られ た御遺影は笑っていられる。

(代表、遺族親戚の焼香が始り、其の間に一般会葬者の焼香がいつ果つるともなく続き、焼 会葬者の焼香がいつ果つるともなく続き、焼 香の煙りが御堂に立ちこもる程で、御在世中の功績が如何に偉大であったか、その人徳がどれ程高かったかを感得させる実に立派な告 お上げるのも言葉がなく、ただ一礼して主幹 上げるのも言葉がなく、ただ一礼して主幹 上げるのも言葉がなく、ただ一礼して主幹 上げるのも言葉がなく、ただ一礼して主幹 と共に奏水さんが川柳わかやま吟社を創立されて 養水さんが川柳わかやま吟社を創立されて

いる。葵水さんの遺徳を偲ぶと共にこの事を あるが少しでもそのお役に立ちたい れることと信じる。不徳であり及ばぬ者では とであろうか。必ずや葵水さんも守られ導か 育成される事がどれ程葵水さんの喜ばれるこ 消さず、更に燃え上らせ、後進の方々を指導 い太茂津さんが居られる。是非この尊い灯を 友であり川柳わかやま吟社に無くてはならな であろう。幸い奥様も熱心な作家であり、 思われるだろうと察するのは私だけではない うなるだろうかと会員の方々も定めし不安に 失ったのである。これからわかやま吟社はど み、いよいよこれからという時に葵水さんを に願って止まないのである。 お手伝いに参加 と思って

極楽でジット寝ている君でなし 好

柳友葵水のこと

野村太茂津

柳先生のとき初めて出席、その時の席題に最 られたが、 くこの道でも頭角を現わし、すでに一流にな 昨年から取締役社長として現在に至っている 垂井新聞舗を経営―南海倉庫株式会社入社、 兵役は中国大陸を転戦 月二十二日葵水は生れた。 たことだった。 高位で入選して、並いる我々をアッと驚かし 面短詩型文学クラブの、二代目の講師清水白 学生時代から俳句を続け、 立命舘大学と進み、 偶々麻生路郎先生指導の和歌山七 復員後は家業である 経済畑を志し旧制 昭和十八年卒業 血は水よりも濃

は羨望の的であった。 子さんも引き込まれ、同じ道を歩く鴛鴦道中 あの風貌を見ることが出来た。令夫人の干寿 るように深入りして行った。どんな句会でも 才能は日増しに、 白柳先生のお人柄もさることながら、 川柳に傾き始め、坂を転げ 彼の

宴席で初対面の東野大八氏が長者の相だ、と ないくらいで、 校大学支部長、役員、 ータリアンとして、その他垂井ビル経営、 上にあった。 のお力添えで、 社」を創立、 も協力しようと云うことで「川柳わかやま吟 なり、折角の川柳の芽を枯らすに忍びず、 云ったあの顔は正しく大人、 生を歩んで居られた。 そんなとき、七面クラブが休刊することに 白柳先生や現講師川村好郎先生 朝日新聞柳壇の選者として、 愛すべき独特の風貌は、 各柳派を呑みてんで発展の途 ETC 実に密度の高い 席の温る暇も ある П

本社句会の帰途、必ず二人で立寄る酒場で

る。こんなかけがえのない人を奪っ がクシャミすれば、私が風邪をひく仲で 家同窓会に引っ張りこんだのも私だった。 それがはからずも逆になり、返すがえすも残 はさらさらと飲み屋の箸袋にルアリバイのネ くお待たせしました。を入れてやァ」……彼 が、柳縁の心の友は葵水唯一人、大陸川柳作 私も心を許し合った戦友は全国に散在する 念である。 "酒ほろろ葵水の弔吟没にする" タ切れ太茂津が先に逝き″葵水、どうや!!」 頼むで一弔吟披露の前には必ずッ大へん長ら アンには特別のんを詠まんならんでェ」 一彼「うん、そらそうや、弔吟は太茂ッ津 ある夜、葵水君とのやりとりを披露しよう 「葵水さん、年の順からすれば俺が先やな 「没!!」……。大笑いしたことを思い出す た奴が憎

その雲の峰から、 忘れられないだろう。 る声が今にも聞こえそうだ。 うもない怒りが先に込み上げてくる つまでも私が雲の峰に召されるまで "ライバルに又も越された雲の峰 "悲しみの前に腹わた煮え沸り" 明日は初七日。怒り、悲しみ、 を押さえることが出来なかった。 あの事故を聞いたとき、 「没!!」!と怒鳴 どうしよ 周 11

が来そうな、顎から先に盃を乾す彼 "たもっつァん、 一杯やッか』電話

> て来てほしい。 飲みッ振りを。 化けてでも良いもう一度出

水

抄

枯蔦に石仏がんじがらめなり 背を見せるとき崩れてるサングラス 胃の調子酒で消毒して忘れ お人好し過ぎた自嘲のコップ ひとことを耳にはさんでからの 往診の鞄雛の間通り抜け いた知恵で鎖を解く女 洲粥すすり童女の 0 中 のいのちを母に蒐めたし 顔となる 酒 M

後悔と焦りをつなぎ明日を組 tr

い、二人三脚はもう組めないが、



不二田

木 干 代

クリスマス煙突掃除児が 人混をサンタ繰り出すクリスマス ボーナスをキリスト様にねらわな 帰省子がツリーを飾るクリスマス ケーキの灯消すに夫婦の息が合い もみの木も手頃ツリーに子等の夢 今日だけは国境のないクリスマス ボーナスが底をつく頃クリスマスネオンの灯キリスト不在のク**** クリスマスイブで酔ってる無神論 クリ 忘年会かねた社内のクリスマス 国仏 不捨もうクリスマス家庭化 スマスツリーに団 \$ クリスマ 地 せがみ の虚栄心 肖 奇 軒菩祥梁弘竹好ろ無 大太楼 句月水朗馬一亭人

クリスマス庶民の夢が灯をともす

クリスマスやはり仏間に灯をとし

クリスマスイブも早々酒

友へり

飢餓人間が浮かれているよクシスス

孤児院ヘサンタ洩れなく荷を届け独酌のにがさを知ったクリスマス施設から笑いが洩れるクリスマス 久しぶり妻と踊 出ク リス IJ 稼ぎの ディで盛り上げて行くク・スス マス今 7 ス家の宗 無 ったクリスマス のクリスマ 同じとこで飲み 知らぬ ままお 伊津志 利翁季輝 風

イブの

面で晦

日

L

た

L

宵

明

IJ

ス

7

ス

施設育ち施設ヘサンタ買って出る子の夢へ炎えてるクリスマスの雪 祈りなき身にクリスマスケーキが 隠れキリシタンそれでも今日はクリスマス クリスマス女世帯 キャンドルサービスたつた一本でもよくて クリスマスケー クリスマスギフト考えるのも楽し の児へふたりで祈るクリスマ ス施設の子等も早く寝 道 清 キーつへ子の寝息 めよと雪 相 0 応 0 給 5 3 干晚 涯 童 方月義山枝 納まった筈の話 が ま だい ぶり 納まった筈の話 が ま だい ぶり おいこう でいる 高麗田納め我が家の暮が待っている 義理のある顔が出て来て納められ マイホーム手付納めた社がつぶれて されかで何やら淋し納 めの 手にぎやかで何やら淋し納 めの 手にぎやかで何やら淋し納 めの 手にぎやかで何やら淋しれ めの 手にがっている 何を料めると書 貸 もかも納めてすっきり除夜の。業料納めるハイー() へ御用納め を放 0 込 ま 千藤木豊み翁弘隆輝奇与根 の 翁持魚生る童生子親童一 与洋好 根 4 -

クリス

マスパー

1

育園にひと月早いクリス

ス

ル

ベルせわ

しい世相かまだる

明

腹

雪空で終

った聖夜物

足らず

ングル

ベル

人ごとにして辻易者

七素 暁章 山郎 明雅

クリ

スマ

万葉の里もジングルベル 七面鳥何が目出度いクリ クリスマス靴下抱いて起

で暮

聖夜なり

ス

7 ス きてくる

た弘洋かし生々

弘洋洋緑

クリスマス平和のベルで砲火消せイブの町ケーキをさげている軍歌 金策へジングルベルの街 を 抜 け銃口を向け合い前線イブ に 湧 き

夕暮れの人それぞれのクリスマ

ス ス

々水

バ

"

カスが祝う日

一本の

クリスマ

どんたく

聖夜そろそろ信

仰

0

掌

戾

0

クリスマスやなをいっだけ子を持ち

寿美子

やっぱりク・スス罪が終って始まって

A

九

良店

聖し夜をふたりで汚すら

L

43

足

葵

水

III 滋 雀 選

中

アピー 衣縫

ス妻

バに

ッ徹

め納

夜

0

グに納

3

な

60

を出見終め

け客車の

どんたく 金

吐掛舞電

佳

納

ま

5

で老い二人

気

0

軽 な

がい納め女別の会費戻ら

0 80

呼か

吸

<

九

3

暁

童

6

葵克利

水枝美

御用納 30

誤解みな 地 胸に 竜 頭 納 蛇 尾 8 7 さ た 62 慕

ポケッ まらぬ軸 h へ拳納 L のま 8 ま 7 0 から 判 を 0 3 0 意 笑 + 地 顔 里 芳

風

子

中裁の 顔 たて 胸 に 納め大師納め天師納め天神・ないる 仕事納め歯をは 男 の 洒 仕事納め歯がかれ た 毎 子らみんな納まる位置で 子らみんな納まる位置で 手打式 ないかも知れな 御祝へ松の 会費だけ 入学金納 来仕りのである。 から 世 85 知れない あとは男の酒にないめとは めて子明 話に パー 納めて一度も顔 のな 0 供 日は 緑 0 借 旅へ を ま 金 0 明 て来る納 は 日上云か納 老 舞 寸 気 10 確見 から 3 いいれ け 7 笑めせ変 二納拭残 納 なりり ずず 0 < 85 85 葵芳梁静古扇七七明凡本暁カ素右暁 九藤 ズ身 水子水泉方水山山春郎棒風エ郎近明

助

室 谷 徹 舟 選

もひびく 助け な 0

火事騒ぎ不仲見 赤い羽根市長の す助結ねけ局 身助助 G にお合合ン 助助 助助助助 け合 う身の け け H 景気がここに おぼえあるから今日が放った。おぼえあるから今日が放った。 合い身が 合いやっぱ なしをそっと入れてる社会鍋に傷持つ者同士助け合い合い身障夫婦の愛深し 合う二人ザ 合 合 合いの善意小さな記 いれば 事 ポケ 邸と金 云わず やっと築 善 0 7/2 やと募金 ト探す助 一致で 1 顔も借 弟意 0 () 士婦で助 金 0 つり たマ ぶの助 を手助 メダル買 1 け愛け合深合 事で け倦合怠 け 10 ホー 放とい 下る合 来 看 羽ば重合 り話い 3 3 5 い期 寸 根せいい 4 12 0 好 綾 英 天 白 季 軒 明 明 太 本 一 女 詩 涯 汀 賛 楼 春 春 耕七面山水 みどり生 どんたく 弘 無 克芳 静梁祥 朗 生枝 子

壺坂

の月が見て

1/2

た

助

H

合

12

輝

親

恩に着る過去あり

義

理

の子を育

7

洋

k

助け合い

持ってる人は

L

渋

0

助け

合

5

心

夢

金

0

綾

女

助け合う筈が遺産 助け合う筈が遺産 金よりも心で入れる 芸助け合いお金で済ます郷金のない同士手足で 助 助け合 -円を募金ミン 63 + 円 産でこ 欲玉れ 金 風 7 をの をに での 来る助 IfII 赤癖助箱 包 3 つがいがけへれ H 捨通羽つ合寄出込 合 い根きいりし 1/2

緑重翠輝章カ右か奇金 水人月親雅エ近み童三

ご投句に 通信に

柳 塔 柳

笔

JII

七〇円 送 七〇円

価

輝

助立 侧 音

けっにをる

合た立入人

い幸ちれ情

本豐奇綾 棒生童女

知

題 運

朗

運不運あって人生ままならず 同じ腹から出た子にも運不運 ひたむきの愛が産衣の針運ぶ 金運が向けば向いたで怪しまれ (運不運があって人生面白し) (三句ともによく出来た。 ご精進あれ 同同 運だけで生きて来た男の見本

キャンセルをした飛行機が事故にな 同

紙一重運つかむ人のがす人

寿美子 陽 同同 同 Ш

人

積み上げる努力に運がついてくる

重

(反省をしたら幸運とめぐり会い)

反省が薬となりて幸運で

運命を創る努力をおこたらず 金運もギャンブル運もなくて無事 運不運いわず夕陽に手を合せ 青みかん匂い運動会が来る

(運命を創る努力の汗をふく)

運の好い奴だと言われたこともなし (運の好い奴だと言われてみたいもの) 同 静 泉 せめてもの夢に幸運ちりばめる 父欠けた運を負けじと漕ぎ給う 幸運かな虹に振り向かれているトンボ 七転び八転び運のない男 運は天にまかせて場外馬券買う (七転び八転び好運と縁がない (運だけで波乗り越えて来た男 (父欠いだ運に負けない母である 運の良いトンボ公害など知らず (幸運なトンボが虹と対話する) 幸運なトンボだ虹に振り向かれ

どん底へ開ける運勢ばかり待ち

後添いを当てて運勢変えた奴 いつまでも摑み損ねた運を追い 茶柱も運決めかねて焦れったい (運を決めかねて茶柱が迷ってる (後添いを当てて運勢吉にする) 運の糸摑みそこね摑みそこね)

露

杖

同大

成

同

運のよき人なりと人にうらやまれ

悪運が強く病気も遠ざかる

つとむ

運も鈍もそれぞれ持って生れて来

同

(好運な人やと妬かれるほど出世

運不運言わぬ男の背が曲り 運などに頼らず自己の道を行く (運はどうあれ信じる道をまっしぐら) (決断の悪さを運があざ笑う 伊津志 賛

決断の悪さに運が逃げて行き

同

金運などないと易者そっけなし 変秘めた微笑の中に宿る**運** 斗志なき男に運が遠ざかり (愛秘めた笑くぼの底に運宿る (斗志なき男へ運がそっぽ向き 、金運はないよと易者め図星突 三十四 同

ひさ美

家捨ててまで運を賭け捨てられる

寬

(33)9974 EL 部丁 子 本 店 (21) 2334 悪運の強い男の松葉杖 運向いて貫録もでる肥満体 金運が向いたか布袋腹になり 病魔近寄れず)

平

男運悪い女を妻と呼び この人に賭けて見ました家も捨て 乗せられた土地が思わぬ金を生み 一十年も経った古傷に逢う不運 (この人に運を賭けます置手紙 (運悪う二た昔前の傷と逢い) (男運悪いまんまで皺がふえ) (男運悪うに妻の老い進む

> 奴 貞 凧

祐

同利 美

汗のあと知らずに人は運と言う 金運と別に福耳うらやまれ アリバイが完壁すぎた運の尽き 運命の神のいたずらそれも運 還暦を過ぎて運勢聞きたがり つつましく幸運でしたと賞を受け の弁好運でしたとつつまし 根もって生れて置き忘れ) 10 幸 同 同 かつみ 満津子

努力三分運七分とはしあわせな (運が良かったなと汗を見てくれず) (努力三分運が七分とはうらやまし 比呂路

努力不足を棚上げ運のせいにする

くじ運に弱いがうちで強いママ 不運なる今朝も満員バス通過 (満員バス見送りけさもついてない (運が無いよと足らぬ努力は棚に上げ 同 +

H

運鈍根の三んに見はなされ (くじ運は弱いがパパより強いママ

頼

次

近頃木に竹を接いだような川柳?を見受け いがどう言おうと俺は俺の主義 一分間の柳論

江戸時代に始まる五七五の十七文字の短い

あてこすりを表わす短詩とあり、

梅

庵

詩、俳句のように、いろいろなきまりや人

たときに備えて、先ず人が信用する国語辞がないので、人から川柳とは何かと聞かれ 詩、或は柄井川柳の始めた滑稽と風刺を帯 からなる、滑稽、 典に尋ねた。日く前句付から独立し五七五 るが川柳作家とは、どんなものか。 僕は初心者で川柳とは何かを判断する力 又は俳句と同じ形で、おかし あてこすりを旨とする短

始まったとすれば、滑稽と風刺そして教訓

て読んだものとあり、川柳は柄井川柳から

の心などと、滑稽味や、

あてこすりを以っ

ろうか。

盲蛇におじず盲

言許されよ。

座る」時代の流れに副わねばならないのだ はなかろうか。「呉服屋の丹那洋服 を作材とするのが川柳作家としての本分で

派着て御

運まかせ瓢簞いつも駒がなし 振り向いて見たら好運が逃げてい (駒の出る瓢簞抱いたままで老い 運鈍根 いのどれ 十路の皺に見る の無い男 た

気弱さが運命だと思い込み 運勢欄今日もおずおず見る弱気

4:

金運の蔓につかまり引きずられ 運ですよと教えてくれぬ釣り上手 (気弱さを運命だと思う気の弱さ

運動会ママの応援にぎやかに 好運はいつも身近にいてくれず (いまそこにいた好運を見失い) (土俵一杯相撲に勝って運に負け 工俵では相撲に勝って運に負け

別居してる息子の開運祈願する (ママの方がいきり立ってる運動会 (別れ住む子の開運へ神かける)

翁 同 藤 宗 持 義 童

独同無

水

志 秀 津 村

運転し当らぬくじ買い損をした

金運に恵まれ夫婦子無きまま (運転は彼女かそんなら止めとこう) 金運にめぐまれ子宝めぐまれず 転は彼女と聞いてよう乗らず

ベスエ

繁

子

古方手書き句集

努力か運かようやくたどりつき どたん場で色気を出したが運の 被害者にすれば不運と割 運のよいときには雨もよけて降り れず 八 生静同慶

だあまって直ぐ寝てしまう女房運 宝くじの運はボクだけついて来ず (ボクだけについてくれない宝くし) (運試し当らぬ方のくじを買い) 保

どうしても運振りむかず貧乏性 開運を願って印相かえてみる (どう動いても運振り向かず振り 同 静観堂 好

向

同窓会四十年の運不運 整形で女運まで変える気か (金運と背中あわせに貧乏性) 吞歩利

こばれ運でもと願って宝くじ 手もよごさず不運と決めたコッ

岡山県倉敷市下津井三五二 〒七一 十二月二十日締切 (二月号発表

本田恵二朗

仏子

大 萬 JII 柳

入選発表

数者 五五川 百村 句句郎

敷

18 10 別宅でもの解りよいパパになり 7 パになる兆しあわてて式を挙げ 7 パにもお見せと仏壇へ初サラリ の留守パパのカレーが利きすぎる 中口 笑 風 かつみ

ワンマンでもいいパパが居てくな

藤井寺

ンションへパパまれる夜の化粧する

パとママ声低うして金のこと

甲斐性が無うてもパパに子はすず

卒論が残ってるのにパパとなる 肩書はないけど僕の好きなパパ 橋本木 素身郎 魚

パパとなる日の拳握ってた

水

富田林 弥栄子

たまきかにアナタと呼んで欲しいパパ

交通禍パパなぜ星になったんだ

大阪

父の日がくれた父の恩に生き 子を天に差上げパパを実感し 東大阪 枝 4: 句 退社してパパの仮面と取り替える 教壇のパパは他人の貌となり もうみんなパパになってるクラス会

酔うているパパだと判る長いベル

小遣いをパパもママから貰うてる

やんわりと来る要求に弱いパパ

またパパが叱られている二日酔

パパにした蔭膳冬の蝿を追う

パパからのたよりましゃく灯が明い

見

10

パの夢をカバンに背負わされ

Ξ

キャバレーでパパ我が家ではまといるん

善人と信じるパパの太い眉

父の日も残業してるパパでよし 物価高パパは益々弱くなり パパの背に親妻子供の荷が重い としよ

婦唱夫随にも一応パパを押し

尼

崎

美

パパの足跡やっぱり踏んでいた蛙

大阪

ままごとの会話パパの理想像 重役がパパなら会社たかが知れ パゴルフママボウリング僕勉強 東大阪 三十四 代

家計簿の愚痴は結局パパにゆき 哀れともパパが提げてる市場籠 大 阪 新之助

鳶職の気骨がパパと云わさない

日曜日パパの音痴で朝になるパパとなり真すぐ帰る靴の音 親の眼に頼りないのがパパになりママにパパ敷かれてるから家平和大 阪 好 一 子と遊ぶパパ不渡り受けた顔でも ママゴトのパパも宴会よく続き 大阪

出張のパパに受話機を子に持たせ 達観のパパ観音の貌に見え PTA隅にいるのが僕のパパ

良い安い 都 住 買いよい 尾 福 吉 店 店 店 店 店 店 店 crcdit system

月賦百貨店



本社 大阪市阿倍野筋3-15-1 TEL 632-3806 3807

あたし 昭和四十八年度 青春をわかってくれるパパと飲む 新しいパパはなんでも買ってく ガリ勉をさすなとパパは云うてくり 一人だけになったらパパと呼ぶ女 、いよいよ本年度の結末になり です。 、パパというイメージが十年 す。大会は次号に発表します。 会則は従来通りですから略しま ました。来年度の大萬川柳会の り込んだ句を選びました。 うで、天地人には現代世相を折 を問わずパパと呼んでいるよう 女からパパと呼ぶ場合は別とし と大分ちがってきています。彼 詠み古された句が多かったよ の居る日 お父さんと呼ぶ代りに貴賤 には良いパパで上使い込み ベストテン(十月現在) 梢 曜 何 7 マもよく笑い 二二、〇 富田林 尾 塚 美 馬 12 五四 Ŧī. 昭 和四 どんたく 重緑牧桃 本蔭棒 カズエ 真沙子 弥栄子 吸醉克好 第二回 十九年度第一 好 締切 出直し」五句以内 十二月二十日 五 Ξ 一、五 一、五 0,0 = = Ξ = 0 -; -一、 五 Ξ = 四 24 24 Ti Ti. 0 和歌山 藤井寺 東大阪 富田林 松 郡 八 堺 否 堺 倉 阪 III 阪 敷 敷 原 阪 Ш 尾 敷 塚 の句は、 で、「井筒」が作者の頭にあった れしなり」というところもあるの の女とも の有常が娘とも 地『または井筒 727 ことは動かぬでしょう。 一十一月号所 いわれ **T** 593 投句 そのあと、「人待つ女とも云は むすめともいわれかかさんとも jii ます 喪中につき年末・年賀は欠礼させていただき 傍柳》初篇研究 謡曲 藤井一二三方 堺市堀上緑町 をふまえています。 「井筒」の「シテ『紀 載 萬 (百二十四) JII 八尾菜の花川 柳 の三の 月二十 五句以 係 柳 儿 七 出席 柳 氏。 柳塔」から、諸物価の高騰による の告別式となった。 念句会。その日和歌山では葵水氏 ▼11月4日は 文秋・小松園・いさむ・一三夫諸 わを・生々庵・形水・水客・栞・ 誌代改正案など。 主幹。発起人は麻生葭乃・阿部孝句碑建設委員会長は中島生々庵 日発行となっている。 は摩天部句碑建設、 木幸太郎・中島生々庵諸先生。 太郎・河盛安之介・我堂武夫・高 12月2日は 久しぶりに本社での 会 川柳塔社常任理事会 摩天部著「心のふるさと」 尾 多久志・柳志・静馬 薫風氏の肉眼刊行記 立八記木 心心不管天郎句碑建心心不管天郎句碑建 同人句集「川 栞 集合。議題

. 42 .

は当

稿締 切 毎月末 新之助

⇒ 法応募の選者三 ・ 大阪される。 ・ 大阪ないる。 ・ 大阪ない。 ・ 大阪ないる。 ・ 大阪ない。 ・ 大阪ないる。 ・ 大阪 ▼大阪文化祭第25回川柳大会が11月11日10時から中央会が11月11日10時から中央会が11月11日10時から中央社が会館で開催。薫風氏の人柄会館で開催。薫風氏の人柄会館で開催。薫風氏の人柄会館で開催。薫風氏の人柄会館で開催。薫風氏の人柄会館で開催。薫風氏の人柄会館で開催。薫風氏の人柄会館で開催。薫風氏の人柄会館で開催。薫風氏の人柄の町としてマスコミの形がの参加者と八十一名ので、アメリカから露角、紅女、涼メリカから露角、紅女、涼アメリカから露角、紅女、涼の参加者と八十一名の投句の参加者と八十一名ので、アメリカから露角、紅女、京の参加者と八十一名の投句の参加者と八十一名の投句の参加者と八十一名の投句の参加者と八十一名ので、アメリカから露角、紅女、京 が募会一々 が完全に放送 れ主の選出 る幹は 柳氏N月N 部門からからいますが、日本日本の本本の主による原文を表している。 出席を利行記 一投七、、ミ回句名涼アの 東九条西河辺町三〇 行東転▼

美一画集· 東 一一画集· 東 九定

短町四の八・蒼 大下川柳集大 大下川柳集大 田画。定価五百円 単東京成 東京成

▼東野大八氏(美濃加茂市)は本社の肉眼刊行記念句 会に出席。閉会後の祝賀パーティから食道園へ大八、 「一泊された氏は、翌日本 社訪問、飲む人と飲めぬ一 三夫氏が数時間歓談され、 を記述ない。 を記述を が記述を が記述を が記述が を記述を が記述が を記述を が記述が を記述を が記述が を記述を がいる で一泊された氏は、 のでした、 で一泊された氏は、 のでは 変が がいる でした。 で

(副理事長)

の若本は選出

宫西干 6

あ辺0

1 ナ

京都市南京ル事務局を

発区移

▼傍島静馬氏(宝塚市)の令第省三氏が十一月三日文 ・一月三日文 ・一月二日文 ・一日本 ・

▼戸田古方氏(豊中)の二男光治氏が若江美恵子さん と十一月二十五日にコクサイホテルで挙式。 ▼野村太茂澤氏の(和歌山市)次男保昭君が三浦公子 育会館で華燭の典をあげられた。――愛二つ結んで今 朝の天高し――葵水 「大江秋月氏(姫路市)の 大江秋月氏(姫路市)の にと十月四日大阪弥生会館 にと十月四日大阪弥生会館 で華燭の典をあげられた。

階電波新聞社文芸部『川柳宮と島三の三朝日新聞ビル6と島三の三朝日新聞ビル6とと。(新聞柳壇発展のたたとのに積極的な投句を期待さいと自賛しきりだったとのいと自賛しきりだったとのいと自賛しきりだったとのいと自賛しきりだったとのいと自賛しきりだったとのいと自賛しきりだったとのいと自賛しきりだったとのいきには、 へ) ▼米沢暁明氏(大洲市 本大沢暁明氏(大洲市 W 同 人 0 動 向 Ψ

は市 脱いは 柳6中さたの

にもない味

のこと。おおのは、関い、 なわの様相で落ちつけぬと期も迫り、早や選挙戦たけ機の実家の福こぎまで手伝われクタクタの由。とは、日本の議会任と氏の議会任と氏の議会任と氏の議会任と氏の議会任といる。というないと思つくまもなく奥 1 क्त

だったと。 にといったと。 か来たので、水へ花の使いれた。 で整備等で多い機能を 軸マ11 幅を出った阪マ 忙 さ松

▼久家代仕男氏(平田市)は ▼人家代仕男氏(平田市)は ※の検査、買入れ保管等一 ※の検査、買入れ保管等一 がは11月25日道頓堀朝日を がは11月25日道頓堀朝日を で、小川流(先代小川千代 で、小川流(先代小川千代 で、小川流(生産の上の多忙な養成 を成立しておられる。 は11月25日道頓堀朝日座 で、小川流(生産の上の多になる。 を表しておられる。 は11月25日道・一 を表しておられる。 は11月25日道・一 を表しておられる。 を表しておられる。 は11月25日道・一 を表しておられる。 を表しておられる。 は11月25日道・一 を表しておられる。 を表しておられる。 は11月25日道・一 を表しておられる。 を表しておられる。 で、小川千代 で、小川千代 ました」

20

▼尼緑之助氏(出雲市)から「十月六日の竹内李朋君ら「十月六日の竹内李朋君ら「十月六日の竹内李朋君

た関回小川

久米奈良子さん

新

L 紹 () () 介 不大阪

汐風川柳社会長

月

原

水・文庫

.

生々

推

薦明

本 | 那羽欄新静恵峡原

谷

文庫

· 宵明

推

薦お

0

3 盛

▼森井菁居氏(竹原市)からの通信から竹原の古江雅 原氏が広島県三次市で交通 原氏が広島県三次市で交通 でる時間などで、一部で大阪中死去されたと でを椿温泉の宮貴で大阪中死去されたと でを椿温泉の宮貴でで標10 に川維時代指導をうけられた。またの諸氏にお会り に対しているがる大サービス を受けられた。またりの諸氏にお会い で、11月3日朝まで松江雅 を受けられた。またり日がら第二 を受けられた。またり日がよります。 で、11月3日朝まで松江雅 を受けられた。またり日がよります。 で、11月3日朝まで松江雅 は、21日前まで松江雅 は、21日前まで松江雅 は、21日前まで松江 は、31日前まで松江 は、31日前は は

三日▼

送本

-緑之助

.

朗 . II

.

遊

風

推

薦

子

イ10

IH

★垂井葵水氏(和歌山市) 本社には大阪から西尾栞 初七日には大阪から西尾栞 が七日には大阪から西尾栞 が一月一日夜交通事故死 は十一月一日夜交通事故死

故副初さは▼

▼大矢十郎氏(新宮市)から「葵水氏の告別式(11月ら「葵水氏の告別式(11月の盛大さは和歌山で 11月

拝ら▼ 島田 川季 柳会 云の句会寄せら、(高槻市)

一県境嶺染めた県境白布峠を かいで 市長賞 書か

月奥20谷 日弘 の大安日に退院。

電始後鉄末六

内。

電鉄本社食堂表本社食堂本 ・どん尻 ・ とん尻

・会場は南:

海後午

会場

は八

E

K 八木摩天 道

郎失

へう・

4

集会室2F

場 1

場は文秋宅近く光明寺。―ト・おびえる・配役・・年後六時――題・寸志・年後六時――題・寸志・

.

志二

会コ白

第会細日▼ 二場い午東 集は・後大 会場は東大阪市中央公民館細い・つまる・モニター・日午後六時──題・越す・日午後六時──題・越す・ 題・越す・

疲労回復・肩こり・神経痛に

☆25ミリ錠・ほかに5ミリ錠 ☆食後すぐのむのが効果的です ☆くわしくは医師や薬局・薬店で



28

十後六時から一

柳会は十

題

月

Ó

句

橘高 八萬風著 肉 眼 刊行 記念句会

会場 ·大阪府中小企業文化会館

11 月4 日

ものがあった。 薫風氏の広い交友関係かなと感じさせる 覚する顔がずらりとならぶところ、さすの香ただよう会場内は、他柳社の句会か

ちに栞氏の柳話が進む。 行なわれている垂井葵水氏の交通事故による開会に先きだち、今日和歌山市で告別式が へ黙悼という一幕があり、 悲喜交々のう

く寄せられ、花束贈呈や記念品贈呈など錦上祝電も番傘主幹の近江砂人氏ほか二十通近 づくこの句集も川柳のバイブルであると。』 花を添えられた。月間賞は堀江芳子さんに輝 先生を慕う 一薫風氏の 句が多いこと。また / 旅人 / につ / 肉眼 / にまず目をひくのは路郎

干尋・誓二・夢児・みづゑ・俊夫・トク子・ひよこ・春江・緑水・いさむ・菁風・洋敏・ かし・弦月・舟遊・良子・肖二・綾女・一舟平・薫風・新之助・文秋・雀踊子・葛城・た · 花梢 · ٠ 出席―滋雀・清造・ 醉 々・酔夢・夕起子・智章・栞・岳人・俊一滋雀・清造・大破・涼子・大八・三窓 いわを・吸江・勢火・定子・勝晴・ 進 行·西田柳宏子)

恵美子・瓢太・一三夫・野迷路・芙巳代・冬

6

幸・好一・喜風・夢成・鬼遊・牧人・静歩・生・凡九郎・柳志・季賛・小松園・弘生・美・智子・王子・儀一・春三・静馬・笛ニ・メ女・亜鈍・天笑・幸生・喜美子・鶴声 宏子・修史・庸佑・亜成・葉子。維久子・久美子・形水・つき子・夫美子・ 柳

題 波 野 春 Ξ 選

けだも 電波さやさやと少女恋で少 化して島の電波 りの電波をカチカチカチと受く には遠い女と恥いめだれてむらさきのな のになるなと神の電 って恋を埋めにいて恋を埋めにいて恋を埋めにいる。 の無いない果での画 上で酷 上と 0 れ で恥 7 像が良い する 行蛛ハ 寝へ使てがく 来る < す向さ居あ電 0 1 的 3 話 夢俊鬼俊良天董夢勝清夢 児平遊平子笑風成晴造成子

> あっぱれな夫婦電波に切られている電波乱れて化石の中に蹲まる島の電波の冬の影絵をつくらんかまる 私の電波凍って走父は電波を知りつくし鳩 数電不巨人となった。 首 がつながっていて電波がひろがる。 猫 の 電 波 で 椿 射 落 さ れ 電波 00 罪 電波で が か も火 朝 っ柱の がド 波 走場に ラ マ見るる る答え なな 3 63 春冬恵美三二子 芙 洋 春 巳 天冬大夢 良智 二破児子章代敏江

跡 永 清 造 選

題

足跡をふりむき敗けたなと足跡でこので途切れて生きて足跡でこので途切れて生きて 水際に残しこいる枯れている枯れ 足跡の 続けと言 冬の酒場へ足跡ひとつ捨て足跡の一つ一つに父母足跡の一つ一つに父母 逢いに行く足跡までも君 父の足跡が大きくてつまらないわ 大きな足跡のあとに小きい 足 4 深さに自信 消さぬ男が憎めな 恋 この遊びとなる 別と かる と 0 足 見え なとにてい るてが価 15 7 い足れな 跡野い 5 3 0 3 L 3 3 天 ひよこ 祭 安子 良 雀文良智冬春夢俊花夢智洋 踊 子秋子章二三成夫梢児子敏

の駅東く護駅駅 う弁のに送弁が を間を 駅郷駅も駅東弁秋弁う弁の 弁をうま \$ 郎買の出人紳京 < H お る日 駅い郷 に十のな なかは と弁そ愁 もを名 1) 0 い買て駅駅駅忘残駅 元 弁駅 ういな弁弁弁れり 弁だ本 ったがあたを \$ \$ 走 7 い刺た走持海 友 北 5 妻 6 をた りちががを 生のいさ恋げもか振帰匂白も 会なれし 3 つし 1) 0 5 春 巢 た喜三緑綾君冬誓幸 1 良夢千 かし美子 選

窓水女子二二生子子成尋

を吹きない。風に心思を吹きない。

の青をを

し年せ持

むつ

れ走

放

久美子

去 5

った男

て佇

八風

1)

C

あらいく

円匂通

都がみが喪を

<

れ風

の光な憎

風すずる

秋り知

見 120

を

秋 北へ

たくて

古仏を閣の風向い婦布密

L

うす酒る

のだらなよ返ごす創た

風のこえる

少し引 足砂浜の 二人三 完敗 足 お母足全 **上跡にチ** だ ははや足の足 0 な 0 < 足 0 口足 敗けた足 ず足 I, 消 のが跡 03 跡を " 足足 9 足てす 2 足 1 3 * 芒街ざ 鞭 て私跡男 4 跡跡跡は足 しない 跡 が足 がのにをはは 03 思う あふ過子見み うお跡 子认 と去等 な 文 詩 も疲 T はま 0 + を知う ひれ重こ とがお扁のがな 7 のあとたいろな追 こ平背あい 3 5 5 0 日坂へ 寸的水 恵定 舟 芙芙 ひ 岳 美 美 子 遊 代 代 こ 人 清大恵み智恵勢智冬恵定舟 美 美 造破子及章子火子二

題 風 酔 Z

リバイに

駅

弁

5

単

は札

つ忘見味

の顔弁れ

出のはる

士き

冬た駅別駅

持来逆通味つ時配

帰て富過な合切さ帰1

春恵静葛恵み花清洋勢

さりに

初れ

ネクタ中 記谷間経 を 樹経を をく 兼 くきた帰 風るにセイ 本 5 1 < ッを 0 吹あロ と戻 1 風 < 0 病なな 0 を 風 H 3 なびか 風 白と ル風 から 3 同 線 10 す招 風 物い闇 10 K 0 負けてしまった 7 お で風 窓 \$ 3 逢 光の酔 6.3 n 風 君涼操操白要絵千季寿 江 保子 大養子 選

風風

F

< もは

と押はの火ら盗

しにを出ん

かを

0

三 恵 夢 冬 天 千 恵 酔 つ 芙 俊 恵 喜 涼 夫 酔 滋 凡 牧 ー 美 美 美 美 彦子 成 二 笑 尋 子 夢 子 代 夫 子 子 子 夢 雀 郎 人 舟

風を見たお 地えたしじまち 服着て風を重た いり笛 風 の 夫 いり笛 風 の 夫 いりで見たおんなはな ななくい風に画 いない風に画 の 大 の帯の燃風に ぬ思いをはて女はす 歴史と 北風 史 小吾 を へ内御 合歓 男 れ風 僧 は な風助幣 にが 見 10 でがのの 00 \$ 葉 会 っあ つせ ま 7 るしじ 話 7 なさ風 去 をを な消 < 去いれの出支受 る女たたす 3 ま る詩すえけ

夢雀郎人舟

0

てが和

かな子で駅

E

7

き間ら

るいれれり

弁

をは

だど買いかみ

う

7

7

卜飯

弁け

12

つがや持の ゆ痩 題 せた 2 う 吠 い故 身 0 ス え 風透 でに わた 身 痩 れ 邪け ロた ナを ば痩 L 7 7 身 人るの 詩 が 無 鬼を闊気をだけ 高 ts ゆわすがす 0 杉 除 くせる り力け 82 鬼 遊 惠 要 柳 耕 正 芳 寿 心美子 (美子 選

保子魚朗子

4 LIJ

10

にゆ

俊薰夫千智喜春

美 美 子 尋 章 子

風 落

7

3 0 5 馬 3 3 0

を葉

秘の

き

い溜嘴

をれ 札

7

3

き

00

秋風 か

ば 7 7

抜け

3

とき風 85 35

-57

で 大 の 要 身 が は で 女 の ま は が は き か ら ら く か な き も か に あ る 胃 が が な き り が か ら ら か か な き り が か ら ら か か な き り が か き も か が な き り が か な き し か か な き し か か な き し か か な き し か か な き し か か な き し か か な き し か か ら ら く か か ら ら く か き し か な き し か な き し か か ら ら か か か ら ら か か か ら ら か か か ら ら か か ら か ら か ら か か ら ら か か ら ら か か ら ら か か ら ら か ら ら か ら ら か ら ら か ら か ら ら か ら ら か ら ら か ら ら か ら ら か ら ら か ら か ら ら か ら か ら ら か ら か ら ら か ら ら か ら ら か ら ら か ら か ら ら か ら ら か ら ら か ら ら か ら ら か ら ら か ら ら か ら ら か ら ら か ら か ら か ら か ら か ら か ら ら か 間音絵 抱ま妥けずいい美割風影根訳除妻貌届痩せせグ をがにくま協め痩そに徳れでをがでがとときせててに見 て落くびをせ 如喉せぐせうくかるく連合なな子な過給いくす見い葉すた見細 仏ずり男なるな音るれいししとるぎいるるる 大天久絵君不勢み三良智小大修酔文冬弘君弘柳牧美冬笛涼久恵酔俊み 己 松 子子朽火ゑ窓子子園八史々秋二生子生志人幸二生子

花新豊豊豊健赤虹豊放押過逆黒心アポ肉二花満豊豊四胸 ・明かか漁康ト消満牧花疎境髪かがっののに足なさなのか。 ・時書ささにだンえなのにとに髪かがっののに足なさなのか。 計二人 計二人 題 る を を を を を を か

豊ド豊水祭縫豊柿ひ少砂酒豊偽かルかゆり糸かのとし丘と満り

へての 5 1216 つるい と夫よ もにい 細重よ きい冬 父靴に の磨入 牧 影くる 人 鬼美冬 選 遊幸二

マかン

黄瘦瘦 唇せ身

たなかったなかったなかったなかったなかったなかった。 しきかる人く陽るむち なる 3 君夕満幸静日ひ君一天雀耕あ千蘭夫智肖夢冬清恵智克千寿起 ニ 踊 い 美子子秋生馬満こ子夫笑子魚き翁幸子子二成二造子章枝代子 美子

肉眼で見えな 肉眼で見えな 肉眼で見えな 肉眼で見れば 肉眼で見れば 肉眼でたしかっ 肉眼でたしかっ 肉眼でたしかっ て曖母哀抜ら位とぬば で彩か味のなないなどの 肉のら 輝判さ不 をたいたにC 最敵眼か罠B見 =3 をが倫後なとががを失い めけ押写見まの思知あ追 りしるるでにいれりういラ 君牧大千酔三梁葛柳半卜絵克 宏 · 司己 · 宏 · 司己 · 子人八尋々窓水城子歩子子枝

な貰塵崩日日空抱ち豊い季貌素

がかかかり糸かとと豊豊ろに 一ジが豊かに出るところ豊かないにせめて「 大れにせめて」 大れにせめて「 大れにせめて」 大れにせめて「 大れにせめて」 大れにせめて」 大れにせめて」 題 湧いている が居ている で人生で人生で でんまない。 でんせい。 でんしい。 でんし。 でん。 でんし。 をし。 をし。 をし。 をし。 をし れゆ満 かなのな 絵穂るをコ守豊豊生平な手鈴詩赤 筆は茶満まったかか考れたををあるく温 持重漬たクれななえでい洗振語うか つしけすでるりりるするうるりれさ 風 牧千 どんだく 本 被 尋 子 尋 鈍 ト智清舟滋ど操 選 7 木破尋子尋鈍子子造遊雀

肉眼で夫を見ぬ の肉眼 美しいも 肉眼を持たぬ案山子になっ 水 れの肉眼 へ肉 雪 なに 動 ホームを いあき が 眼 3 あ 2 ま と遠 動 6 てにきわた てか すーに 44 る灯出ず 1: 62 三定良静緑静美 窓子子馬水歩幸

父肉

肉に

妻より 眼 は巨

62

7 1/2

一耕一天智春 三 夫魚夫笑章三

0

る罪砂

肉眼を持 ものが

たない しく見える肉眼

政 \$ 治家

者察け

īE.

病

0

もう正視するも

こきな愛 若

平の愛亡和がだ母

いた 3

> 肉眼に母 肉肉

L

眼

王肉

眼

欲

L

3

う 5

河井庸佑整理

眼 K

弥

かとあり乳が勒菩薩の住

の住 5

10

煙

突 を

をみ労のみ

薫芳干大寄龍 風子翁破木子

な っ遺

める船名平

久美子

肉眼で解けぬおんなになっ肉眼にのこる時効のあの 最 の肉眼を刺す冷

きのう・きよう

色

服

久美子

服

3

0

か

でで知読

本 柳

しばしばだった。そんな日頃の不満をうた の毎日に嫌気がさし、仕事をさばることも 当時彼は宮廷で左拾遺の職にあったが政争 の池へよく散歩に来ては詩作にふけった。 ないと思う。 リジナルかどうかはわからんが、 なり、がこの言葉の語源である。 杜甫の詩、曲江の一節に、 ったのが「曲江」である。 を広めた功績者が杜甫であることは間違い の東南にある池で花の名所。杜甫もこ の代名詞。 曲江は唐の都・長安(今の西 節に、人生七十古来稀 古稀、 中国・唐の詩人 何とも 杜甫のオ この言葉 運命

る。 た。 ことと思う。 杜甫だけでなく、人生50年と諦観した古人 編集部で一度川柳塔の平均年令を調べて毎 川柳人の平均年令はいくつ位であろうか。 ある。年毎に老化して行くと言われている にとっても若死したことを残念がっている 0歳の誕生日が祝えることになるという。 女75・9歳だ。男の63%、女の77%が7 の歳になった。平均寿命が男70・5歳、 の後地方に左遷され5歳の冬、遠く長安を 彼にとっても70歳は、まれな歳だった。其 まるで自分の一生を予言でもしたように、 歳まで生きる人は稀なことだ」とうたった ることだが、 しのびながら不遇のうちに一生を閉じた。 ◇平和で豊かな現代日本。70歳は極当り前 ないが其の傾向を見たいものだと思う。 思えば遠く来つるものかなの感慨であ 定の日に発表して、老化か若化かは知 「ふり返るわだちの跡の長さかな」で 実は柳志もやっと古稀を迎え 人生は長くはない。 昔から70

古稀をまだ六十代の定期券 柳

て曲江に遊び酔って帰る。酒代の借りなん

どうせどこに行ってもや

宮廷を出ると春の衣を質に入れ

垂井千寿子さんから

ずついついお礼状も延引いたしまして申し わけございません。 突然の出来ごとで何も手につか 不二田一三夫宛

こんでいることと存じます。 いただきますとか、地下の奏水もさぞよろ ております。12月号には追悼記事を載せて がっていただいたからだと、うれしく思っ てよかった、故葵水が生前、皆様から可愛 励げましをいただき、今さら川柳をしてい 川柳のお友達の方々から、 なぐさめとお

ます。 います。 の糧として、一生を過ごしたい考えでござ 私も亡夫の志を継いで、川柳を唯 今後も皆様のご指導をお願い申 0 C

御礼まで。 皆様によろしくお伝えくださいませ。

をしのぶ記事で埋められている。 新宮の "みかん" 11月号は、故垂井葵水 計報聞くしばらく闇に吸い込まれ 十郎

59

かならず 締切毎月末着便まで。21行以内。 紙に ペン書きで文字は

式は発表誌のように下三マスに雅号。

のがゴロゴ その暑いでる

Ete 見せられた隙と気す、 見せられた隙と気す、 見せられた隙と気す、 工川抹 録へひげとはげとがプ 柳 大阪 さつきに 也 と気付かぬ のノ虫ー け巾はの るか歌水ラお 虫 児ががににけ出ら はと をス人 ぎる かさ好鳴出 あ長秘出借 3 0 凡重一胡漁 乃 々人字蝶人 志報

歳のいと なっ

かしい

< う

に居ようが老してなみ人間

下すわのられ熱ま

潤

びお老

水遊び 裸と裸嘘

7

7

る気いいり

多形頂静君儀 留子

ま

うとこ

ts から

がた が

屋は知っては裸祭

欲の無いおひとですなけか断絶の芽ばえ小さ な う そ嫌いとも好きとも云わず竿

うそ

亢

笑 to

へうとき

す

3

君儀一好智あ俊滋子一舟郎子き夫雀

ある出合い笑って別れようと

S L が

ゆっくりポ

ズ

E

故つ

返すもの返してこ ころ

ャツの跡クッ

キリ真夏

柳宏子

病

わくも知らず花屋でみ

S

L

で帰

った

頃

胸に寄 to てやくを月寝にかをだの 変おかれし るりりれずり行り 久草芳浄伊宗柳武飴初幸三恵輝胡秋一清正水 米 佐二月美野義子夫坊美仙子子生風月声春洲仙 兼場日 会費無料

木摩天郎 「心のふるさと」当日 5 9 0 堺市 香ケ丘町 丁

·席題

なし。

欠席投句ご

0 吉岡 青香 宛九

3

濡第六 夏の昼気の星 0 ダ少年 K て若 泳はまも見日る け苦返 が薄に知事 5 0 喜洛秀本三道 醉 醉 峰 棒 四 子

八 木 摩 天 郎

建立 記 念川 柳 大

十二月二 一徳御 西 日 0 一〇〇メートル 日)午後一時

題所時

西高 村 好 郎選 彩沢小松園選 村左久良選 操子

旧家」

高い

60

3 お

中 JII 晃 男

解説されれば些か判じ

へお勤めの故か、

されるから日を載せて少しでも強めるのだー

が

雅号ぶっちゃけばなし から わ

旅行日

のその日の雨

7

0

の絵馬古

子を捨て

る

様

な男

妻

も

逃

つき合い

金婚式ハネムーンのように女 も う六月の陽へ腕

六月

腕

を

Ш

六方焼煎 六月の風

~

る舌

六法全書

小最 脇に

級 急ぐ

を

意識

す 地

神田

2

双

H

L

K

又

戻

茶が六で素振

素肌を撫

でて

い六六

7

社

H

も香華

絶

82

雑草のようにきっ

かけのが

な

酒いつの間にやら歌になり 旅に立 H げ L < 0 3 3 蔵 0 子 ます 駒志春豊 治郎 子津巣郎 鉄茶浊弘 つ繁秀 賛 葵生駒 均水生ね子村 ・五分間刻み首相 その後 妻の留 そののちの事は 再婚のそ 14 スケジュー 生 名女優其 スケジュールのメは赤い灯 エンマさんだい知ついるスケジュー ケジュールより一升びん早う空き 得 理日 壇 んにはふれず が を外して OK 守 後いか 腹は茶乾 出 の後のこ 札 ル意味ありそうな二重丸 東 ぬ 0 何ンにも 仕 恋のスケジュー とを て鉢い巻 潰 金 スケジ 盃 え け 12 承 П き 0 溝 3 Ŀ 10 知 納 青い灯で かる ,73, せやずら 得 15 5 門原み 寸 せ す

12

無英とんぼ

IV

みのる

雅佐女

のる

だけ) 使ってきたのだが、 大連で満人占者に見て貰ったものをペンネームに いいよと云ってくれた。 119 で読みは同じ。 より余分のものがくっついている 本名の光男と 知合の易断家もやはりこの方 三十年も前、当時の関東州 川の中の光は水に邪魔 63 いろい

友情を捨てて貴輪に湧くフ

づら

を

7

馬 1

7 祭

国家公務員 (大正四年生

てるおさんと呼ばれてそれもい たら更に効果があったかも知れない。

63

ナと素直に若々

あきおさん

しく返事する私なのである。

チになったのでもあろう。川でなく中山の姓だっ

私の頭が輝いてきたというオ

物めくが、そのお蔭か

馬 ブーム乗馬・反物の上げ下げて 馬方にか の 種馬と 友情は 生活を 牧場の テレビ 脇冗に設になる。 ママにま 公害をま 兀 談を を追う目が血 オー 家体操 生 な 1 0 3 っ馬 C 2 the エスケー 厳 ねだり 出 7 0 4 1 82 は 3 3 4 静 動 荷 楽 す 頭 走 我家 一川柳会 き 3 馬 か れ 屋 友 駄 身 ま な K 0 \$ 車 ば 0 挾 秋秋騎 か 波 0 深 良 意 虫 ま 太 を手 懐 H K 4 かしい 見 0 起を - ts す 揃寄体 耐 大坂形水 t. 10 足 好入形弥神 越 喜美代 れい子

の村珠江

家族皆走しる楽し サイクリン サイクリング若さをためす仲間入り サイクリング車の排気ガス を吸 帰宅して無事故まこびサイクリング 途中からサイクリングは歩 ェックする赤鉛 クリン クリン クリング身軽く乗ってかっこも 南海電鉄川柳会 グバスの故障を見て通り グ声な合って行くカー グ地図にない 4 筆 10 (大阪市) IJ あ IJ と見て帰り かさ 3 IJ I 2 中肖 れ 63 辻圭水報 句念坊 女水郎 一信子

郎仙水生田夢泉扇地一二成坊井

変なところから字 な で あ あ 青 表 都 市 改 造 鉄 を 未 ま 都 市 改 造 鉄 を 未 ま ま で あ あ 青 変 嬌声が 侮られまいとする 智 嬉しさをかくせぬ リバイバルソング飛び出脱衣小屋 一つ 残りし 色紙貰うたばっかりに額 こうろき ウインド 秋の蚊が小声で別 穴一つ見 美しくからまれ男 帰えろうか居 熱帯魚ガラス破りたい日も つくと知りつつ恋をし 格 まる 和歌山七面句会 0 7 ヘヤピンカー した酒がか 袋 さかいにチ クしただけで大穴買 ベに川 ウみんな気に入る服ばか ぞけ の暮しに看板め つけ 出 所 進 悛 出よう 詮 路 ば T 世 柳 ハミン エッ 会 K れ 5 を 形来春 でかよ ブに 告げ あ な 恵 0 をパ鉄 クし 3 底 グまだ続 浜 た 0 13 2 3 明日がな こだまする L パ板 高うつき と看とあを書 てまんね いそびれ あ恋 12 < が 力 立に れかま ろの 来る 1 留地 て振え 包 知 のれ 村 な 先 3 筋 5 N 63 ブ 寸 0 屋 < 3 3 太茂 幸 柳宏子 六龍子 あい 飘好立寿一茂扇 雀誓文牧恒喜綾鶴古俊肖好儀 貞 酔 美 太郎児子世児里 郎 き 幸子 二秋人明風女声方夫二一 子 12

ライ

バルがヒントの鍵を どんぐり川柳

0

てる

騒 騒

い奴

ti た覚

顔

だ

け

会

谷垣

空好報

が

れ

と仲え

\$

77

10

期園

幸夫子代

\$

紫陽花の色が変っ

7

V

1

新

に

冷

呼()

C 握

3

生の途中に罠

視

13

3

腹

決

25

人生の金 で 長 を で 長 を で 長 を で 長 を で 長 を と 民 が 置 京に来たらしく東・東寺閑静仏が住む 途中からこっさ 中退を卒業 人生の途 ぬるい湯につかりヒントを 反 趨 し大発見ヒントはリンゴが落ちただけ ゆっくりと追えばヒント走 り 出 す社のピンチ社長も目立つほど痩せる 途中まで送りましょうと住 市 京都 0 車 一つの墓標に逢い 卒中 楽しさ 塔の会 そり女乗 とりな乗 とりな乗 東 の鬼 塔がの 0 履 駅 てく 居 歷 < 出 ま 石 見むの な 3 左 0 < か隅 L 杜 儀小い好岳吸凡比鬼薫弥 松わ 一園を郎人江子路遊風生 的報 美喜儀 好保史幸風

> 句 地 10 選 前月 号から)

来たよりもまし台 屋造 幣 局 明 治 娘 の 箸 で 事 立往生に たたかれた手の暖かみかみ 二次会で待っていましたしぶいのど 験をた 0 ぶりと出る乳 佳 写 明治娘も なるとは知らず飛び乗って 真 りに 子 供 捨 t 足 ててて 0 に 婦 通 る 釘 布 0 も り焼団 L を か 抜抜芋掛 める 渡 生 < け屋け 9 专 柳 拝 弘 秀 喜 一 宏 草 小 牧 静 山生村一扇子二路人香

名産

35

ぶ時地

才街

な買

す恵味札

倦保を気が知

怠育出ななれ

みいま智うの

的で候

がれ

た 見抜い

ほ

補

の婦

12

名 た笑いか

買

ふ富光葵凡し勇く

子治水

211

薄味に舌 名曲 川柳ウイロー社 門五塔 音楽会今日を晴 ご隠居は歯の浮くジ 布哇代表ウクレレ コンサート れても軍艦マー 7 アノの 京無 味 コンサー 判ってるような顔で聴 15 音 鍵 n つな 夜東外 チ 社 か ャズが れの は L 12 0 ワ 0 着 7 勇 3 D 12 色 母は定 気に入 ま 空 を寮 林持生暮開 L わっの よ持れ 才 < 8 き 蒼 ち活 蛇 十拝楼 伯美雪稠小公 杜三善求笛水誠 報 雲和女雄雪女起吾山 的求信芽珠客史

思い出 ナツメ 音楽も 音楽に 音痴か ガン 雅号ぶっちゃけば 川柳たけはら 期待はず ロとジ 役 なして 半 あ 踊 0 止みはじ 0 のメロ りもすき 5 0 わ 文 持 れ + て来るぞに 2 ニデー悲し 2 名 れ 0 ズ け たような た Ш 0 き 0 0 友 < 抖 15 0 4 っとなり 4 せん 時知 重 老 感 ま 送 3 1 碗 漕 63 林井菁居 3 2 雪 0 3 4 ŀ 酒 腰 ラ なし 河蒼蛇楼 カロ女 万 峯 暁 里 歩 円 舟 美 草水山千河 報

虫格言が

潰

虚 0

<

胸

77

<

跡に

0

聖 US K

珍珍

仏も ◇遺句

暑

に

え

22日 た

逝去)

青 3

嘉

碑 T

わ

語陽

らか

ずむ

のばら風 63

沈

ヘタオ

ス 0 耐

かわりにしてきょ

水枯れて

滝ド

レミファの

を

n

寝そびれた耳に虫の音あり

から

た

ッとする間もない明

あるの

です

明詩子幸光晴

文英貞蘭東文笑紫

次第。 一議によくミスプリントされるので、 じめられて生きねばソンソンと、 川柳塔になって「弘生」と改号。雑時代の柳号は郵便屋さんのこと コウセイ、 120 柳号は郵便屋さんのことも考えて 先生につけてもらった俳号が コウセイと可愛がって頂いたが、 大正区に居た頃、 或柳 生 潰瘍にさんざん に執着した 友のすす 「弘村」。 虹村

U 3 お 生

弘

もあって届け出てある「ふりがな」

も併用してみた。

5

スプリントも不思議に気にならなくなり、

あぶな

65 -

夜

しかし改号に反対の先輩の言葉も

の通りに

「ひろお

ひどい

仕業だとぼ

<

仕業から

名

人芸

0

IJ

U

" " " "

カー カー カ | カー

を閉めて職場

顔 L を

U 17 п

0

ф

0

出 は

張

生酔い

0

仕業カ

バン入れ

ネか

本社原簿の

とよんでもらうように宣伝中。 ちよっぴりと女難の相もある雅号 通り「弘生」と書いて「ひろお 耳鼻科医 四十八 弘

歳

渡り

黒の橋

3

眼信 3 25

ね

か

わ

¢

5

JII

孫抱い静 消しゴムのまあるくちびて 7 尾菜の花川 63 か 生きて 夜あなたの寝息を 母植 書き置きがこそ 柳 0 K たなな 5 \$ 聞いて寝 とに排ば 夏 終思凪 他ゆ 3 3 40 ぐ的

不精髭など

ぜて情

が降

3

古

3

雨太十働

を才 3

ナレ

け

j

5

花

1

陽

二浴中 人び途

7

渚

育 な

ち 0 台

な

が私作

千房 美子

ホ 休

耕

田

0

L 性

\$

荒

6 が楽 子

3

난 九

3

暮

3

净鬼

味ではないが 味など 味添えてうるさ 5 L 育 < 5 趣 63 3 ってくど たたる美 賭 向 舌 如 き 0 湧 女となり か 蟹 河 < n 黒 to 난 恋 艇味 9

な 加 聞 か未 齝 3 11 1 1 練 3 悦郎報 頂岳い弥儀 留力 大を生一 小松園声 鶴 トメ子 美三祥 中四月 百静栞美肖酔誓綾 その 子馬 代二々二女 美焼水路居 酒

五分前ふと傑作

が共

あ

3

瞳

浮

が深夜

の足音ひそ

Ł

で京人形

夜

明

募 集 水 JII 課 ★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。 は楷書で新かなづかいにしてください。 煙 柳 題 円 K 月号発表 吟 抄 塔 福 > (各題5句以内) 10 10 句 包 (12月15日 藤 岸 北 若 井 田 本 締切 多久 拳 春 南 春 法 巣 志 文字 選 選 選 選 選 JII ★用紙はなるべく柳笺をご使用ください ★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります 課 水 警 放 三月号発 題 煙 柳 緑 吟 抄 塔 送 10 各題5句以内 10 句 句 表 (1月15日 北 若 嘉 本 数 端 江 1締切) Ŧ 多 春 柳 IE. 久 代 志 巣 香 朗 子: 選 選 選 選 選

前月号は29日に発送しました。

昭和四 一 年 分 定 一十八年 十二月 一 日発行 刷所 価 行集 大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地 人裝 更番号 、股市南区観谷仲之町二〇番地 太陽 千二百九十円 = 振替口座 大阪・三三三六八番 電話大阪・二七一—三九八五番 中 二千四百円 百 十二月 即 島 円 542 刷 送 株 蓬 (%) (X) 料 式 太 十六円 会 料 #1 社 共 共 社 ĖB

摩天郎句碑建立記念句会

席題

百

円

当日発表

★投句だけの方は切手50円封入

番 題

号

八方塞り

兼題

はったり」

日時

以和貴荘()

(未

午後六時

(いわきそう)

電話622・1275番阿倍野区松崎町二丁目 (今月の出題

島

各題三句以内厳守 ・河内天笑 好古素瓢 郎方郎太 選選選選

川戸山村 中

村田本田

★電話での投句や訂正はご遠慮願います 大阪市南区鰻谷仲之町20

> 111 柳

塔

社

1月の兼題 鈴

T E L

(761) (762)

三四四

五三

79

夜間

74

ĮЦ

0

大阪市天王寺区空堀町八

番地

表 紙 光

印刷費などの値上げで49年新年号から購読料 一部を 250 円にさせていただきます。 なおす でにお払いこみの分は次回ご送金の月から改 正料金でお願い申しあげます。

会合 社資

出

本 誌 定価 改正

11 柳

塔 社 及 黄銅六角ボールトナット U 特 殊 換 物 全 般

きで、外国旅行や宝くて運をつかもうとして れがこの年の"財 じで千万長者となる人 た大変で、必死になっ トのクジ引きがこれま とさびしい気がする。 も多くの ★さて師走の街頭風景 "桂三枝のズバ この運というヤッ 力にならない。 宝くじやデパー かいるわけだか ラジオ関西の 好作家の雅号 抄べだ。ア "财産" 1)

りつかれている人たち★マイ・ホーム病にとに受けているようだ。 語声大 り、運、というのがあ のだが、ここにもやは ★標語ももちろん作品 ように思うらしい。ば、タダで家を貰っ 金で家を買ったとなれ した背ばなしが、今だ ばくかの費用の足しに 娘たちの婚礼に、いく 賞金で家を買ったり、 タダで家を貰った かった。また標 12 じめ三、四本のトロフ 地容賞、から、路郎賞 柳塔賞、から、路郎賞 がら、路郎賞 会がおわったら知らぬ ったことがないのに、 ろう。 6 ★小出 "質女"とでもいうの う。この人はさしずめ まに入賞していたとい イを獲得している。 かっさらっていたが と才能があったわけだ 強い《人である。 智子さんなんか

が私を追ってきま 葉子コーナー

5

柳の講義をして 去年は葵水様か

いただきながらのジ

ある。 というのがいるもので

ある。川 てきてもやっぱりあ 1:0 から『荒した』そうで 垂井 葵水氏 なんかも ★交通事故で急逝した "賞男"のようであっ 氏から聞いた話で 俳句では片っ端し 柳界へはいっ

うものはそう簡単に狙

名人芸である。

賞とい

もしそうなら正に

らい射ちの出来るもの

ではないからだ。

よいお年をどうぞ。

三美

今年は悲しい思い出 ングルベルでしたが

曲となり『発送日

なくなりました

お電話も

る。小さい賞には一等 になるが、大物には弱 い人もいる。そうかと おもうと大物になると かならず入賞する人も さわしい人がいる。
さわしい人がいる。 くのではないかとおもて会場へ乗り込んでい この人たちは賞を狙っ に発表しているので、 "賞女"とよぶにふ

奥 新和歌

> 賀 崎

観 光旅 能



TEL 和歌山 (44) 0431 大阪案内所 (641) 3 - 1186(代) 大阪案内所 5 6



誇 3

海 風 光 岸 明 媚

美 13

を

JII

柳



